ライオン誌1月号2007年(平成19年)12月20日発行
昭和33年12月19日付第3種郵便物認可
毎月1回20日発行第50巻第7号

THE Lion

IN JAPAN
Official publication
of Lions Clubs
International

1 第50巻
第7号
January 2008

THEME 視力ファースト

盲人のための騎士たちが挑む
いわれ無き失明との戦い

日常の習慣に変化を

今朝の行動を振り返ってみてください。恐らく、皆さんはいつもと同じように過ごしたはずです。定時に目を覚まし、毎日ベッドの同じ側から降りる人もいるでしょう。朝食はお気に入りのメニュー、最初に目を通す新聞のページは決まっていて、テレビやラジオの朝の番組もいつも通り。

私たちは型通りの行動が好きで、慣れ親しんだものに安らぎを覚えます。人間とは間違いなく習慣に支配される生き物であり、ライオンズもその例に漏れません。こうした性質には確かに利点もあります。しかし習慣に従うのみで、もっと良い結果をもたらす別の方法を考えることなしには、ライオンズとしての能力を最大限に発揮することは出来ないでしょう。

国際会長としての私のテーマは、「変化への挑戦」です。どうか、この二つの概念を心に刻んでください。ライオンズは変化すべきで、そのために挑戦が必要なのです。私たちは90余年にわたり、一貫した行動で大きな成功を遂げてきました。なすべきことをなすという姿勢は、今後も失うべきではありません。しかし、周囲の変化に応じて、私たち自身も変わる必要に迫られています。

それぞれの地域でライオンズの名声を高め、会員を増強する上で、私たち自身が障害になってはいませんか。

私たちライオンズは世界中でその価値を立証してきた偉大なる組織であり、成功の秘訣を知っています。他者への奉仕は強い忍耐力に支えられた崇高な取り組みであり、会員にとっての大きな喜びでもあります。それでも私たちは過去に縛られずに進化し続けなければなりません。

ライオンズの皆さん、どうか創造性と想像力を発揮してください。会合を開き、新会員を招請し、奉仕を提供する新しい方法を編み出してください。新鮮な手法と大胆な発想で社会の変化に応えてください。その際、現実的・良識的でありつつ、臨機応変な対応や実験的な試みをためらってはなりません。自ら築き上げた見えない垣根、行動を縛る枠組みを取り払いましょう。

世界は私たちライオンズを、その奉仕を必要としています。これに応えられるか否かは、私たち一人ひとりに掛かっています。

2007-08年度国際会長
マヘンドラ・アマラスリヤ

THE LION MAGAZINE IN JAPAN
January 2008, Vol.50 No.7

We Serve CONTENTS

2008年1月号　表紙
北海道鶴居村
タンチョウ
■詳細はウェブマガジンで
https://www.thelion-mag.jp

THEME 視力ファースト

盲人のための騎士たちが挑む いわれ無き失明との戦い

ライオンズ－カーター・センター トラコーマ、オンコセルカ症撲滅のための共同戦線

6年前、ライオンズクラブ国際財団（LCIF）とカーター・センターは、トラコーマとオンコセルカ（河川失明）症撲滅のための共同戦線を張った。LCIFは、この2種類の疾病と戦うために1620万ドルを拠出。カーター・センターは技術的な支援を提供し、ライオンズは主に資金の拠出や、地域における教育プログラムの主催、抗生物質の配布などのボランティア活動に力を入れる。

トラコーマ

予防可能な失明原因のうち、世界的にはトラコーマ（別名トラホーム＝ドイツ語）が、最も多くの患者を抱える病気となっている。特に北アフリカ、中東、インド周辺、東南アジアの乾燥して気温が高く、貧困を抱える地域で多く見られる。

世界保健機関（WHO）は約1760万人がこの病気に感染、77万人が失明または重度の視覚障害を起こしていると推測している。現在、この感染症は37カ国において風土病的に蔓延しており、これらトラコーマ流行地域に住む約1億2300万人は常に感染の危険性にさらされている。

トラコーマを取り巻く、こうした深刻な状況が明らかになるにつれ、LCIFはアフリカにおける視力ファーストの取り組みを、これまで以上に重点的に行うようになった。

このうち、エチオピアは最も深刻な問題を抱えている国で、治療が必要なまつ毛乱生症患者がおよそ100万人、活動性トラコーマに至っては1千万人にも及ぶ。ライオンズとカーター・センターは、トラコーマの有病率が高い、同国北西部のアムハラ地域から、首都アジスアベバ周辺を中心に、視力ファーストの活動を行っている。

ジミーとロザリンのカーター元大統領夫妻は、ライオンズ会員である医師のテベベ・テマネ-ベルハン（左）とカーター・センターのテショメ・ジェブレ氏（右）の案内で南西エチオピアのアフェタ村を訪問した（写真提供／L.ガブ：カーター・センター）

◆

現在、LCIFが実施しているプロジェクトの多くは、トラコーマを治療するのに有効とされる「SAFE戦略」に焦点を合わせている。

S (surgery)：疾病が進行した場合に実施する手術
A (antibiotics)：活動性感染を治療する抗生物質
F (face washing)：疾病の伝播を減らすための洗顔
E (environmental change)：水の利用や、公衆衛生などの環境改善

◆

実際に行っている事業例を挙げると、スーダン及びエチオピアでは、約7万5千件のまつ毛乱生症手術が行われ、600万本以上の抗生物質が配布された。ライオンズは、衛生設備を改善するに当たってスーダン、エチオピア、ナイジェリアで約3万3千の公衆トイレを建設し、1万7千人以上の健康管理従事者を対象にトレーニングを実施することで、市民にトラコーマをどのように抑制し減少させるか、その方法を指導出来るようにした。

2007年1月と8月の視力ファースト諮問委員会に、エチオピアのライオンズは、包括的なトラコーマ抑制プログラムの拡張と、アムハラ地域内のすべての地区を対象にした2カ年計画（2007～2009年）を提案し、2件とも承認された。この拡張事業によって、更に400万から600万人

に及ぶ患者が治療対象となり、その結果、まつ毛乱生症予備軍の患者や活動性疾患患者への対応において大きな進歩を遂げることになる。

ライオンズとカーター・センターは、2011年までにアムハラ地域から失明に至るトラコーマを撲滅するために、エチオピアのライオンズとカーター・

ライオンズの友、ジミー・カーター

2007年7月、イリノイ州シカゴで開催された国際大会はライオンズクラブ国際協会の90周年を祝う記念すべき大会となった。この大会にはジミー・カーター元アメリカ大統領も駆けつけ、1万5千人のライオンズを前に、予防可能な失明と戦う世界的なキャンペーンの拡大を呼び掛けた。

彼はジョージア州のライオンズクラブに50年以上在籍し、地区ガバナーを務めた経験もあり、ライオンズの活動を熟知している。ライオンズ・カーター・センターのパートナーシップにより視力ファースト活動を推進する他、ライオンズと共にハビタット・フォー・ヒューマニティーの活動にも協力し、障害者のための家を千軒建設している。

更にカーター元大統領はライオンズのために公共広告に出演し、視力ファーストⅡキャンペーン（CSFⅡ）の必要性と、失明予防に取り組むライオンズの活動について人々に訴えた。この中で彼は、ライオンズは予防可能な失明と戦い続けるために、CSFⅡを通じて1億5千万ドル以上を集める計画だ、と語っている。この公共広告は、これまでに世界中の1千万人以上の人が目にしている。

元大統領はシカゴ大会のスピーチ後、目が不自由な男性を杖によって導く子どもの像を披露した。これはアフリカではよく見られる光景で、像はカーター・センターが、ライオンズクラブ国際協会に寄贈したもの。イリノイ州オークブルックの国際本部の敷地内に設置される予定だが、これはカーター・センターにある像のレプリカで、予防可能な失明と戦うために、まだ多くの活動が残っていることを思い起こさせる役割を担っている。

カーター元大統領は、これまでライオンズと共に活動し成功を収めてきた。国際協会並びにLCIFは、カーター元大統領が、ライオンとして成し遂げてきた人道主義的活動に感謝している。

センターに必要な活動期間は4年間であると予測。今回承認された事業は、その最初の2年間に当たる。

この4カ年計画は、「ライオンズ・カーター・センター視力ファースト事業」の下、ここ数年のトラコーマ抑制プログラムの成功を踏まえて実行されることになっている。

オンコセルカ症

1999年、LCIFとカーター・センターは、ラテンアメリカにおけるオンコセルカ症への取り組みに焦点を当てて提携を行った。

この病気は一般に河川失明症の名で知られている感染症で、ライオンズとカーター・センターは、これを抑制するために、アメリカ・オンコセルカ症撲滅計画（OEPA）、オンコセルカ抑制のアフリカ・プログラム（APOC）、そして製薬会社のメルク社と協力して活動を展開している。

メルク社からはメクチザンという処方薬が無料で提供され、ラテンアメリカやアフリカで、地元のライオンズクラブ会員によって、1億個以上が配布された。

エチオピア・ノースゴンドルの学校でトラコーマの予防、抑制教育プログラムに参加する子どもたち

◆

こうしたさまざまな団体の協力を通じて、疾病の伝播は収束し、ブラジル、コロンビア、エクアドル、グアテマラ、メキシコ、ベネズエラといった中南米の国々では、2010年までにオンコセルカ症が撲滅される見込みだ。

現在はこの感染症が、健康と経済に深刻な影響を及ぼしているアフリカの主要な国に事業の重点が移っている。対象となる国はエチオピア、スーダン、ナイジェリア、ウガンダ、カメルーンである。

ライオンズ・カーター・センター視力ファースト事業に交付された900万ドルのほとんどが、このオンコセルカ症抑制活動に捧げられており、エチオピアでのオンコセルカ症に対する視力ファーストの活動は大幅に拡大された。視力ファーストは、オンコセルカ症と戦うプログラムの中で、公衆衛生や予防医学など社会全体を対象とした啓発計画と、地域住民の教育を重要な項目として掲げている。

カメルーンでは、約1600万個のメクチザン処方薬が提供され、ライオンズは治療目標の93%を達成した。

また、スーダンとウガンダでは、約1万5千人の健康管理従事者がトレーニングを受け、成果を上げている。

■トラコーマ及びオンコセルカ症撲滅事業に対する視力ファースト交付金

＊のついた交付金はカーター・センターが直接的にはかかわらなかった事業、もしくは他のNGOとの共同事業

事業No.	日付	金額	①対象／②事業目的	状況
SF272*	1993年1月1日	46,868ドル	①カメルーン ②一般教育に焦点を当てた試験プロジェクト	終了
SF368*	1994年8月1日	1,768,508ドル	①ナイジェリア ②メクチザン処方薬を285万個提供	終了
SF493*	1995年8月1日	2,063,400ドル	①カメルーン ②メクチザン処方薬を3州、1億1,200万人に提供。かかわった非政府組織：カーター・センターのThe Global 2000 River Blindness Program（GRBP）＝ヘレン・ケラー・インターナショナル（HKI）、International Eye Foundation（IEF）、Sight Savers International （SSI）と連携	終了
SF600	1997年4月3日	1,567,796ドル	①スーダン（南西、西赤道州、バハル・エル・ガザル） ②合計1,424,380個のメクチザン処方薬を提供し、健康管理従事者の人員、衛生教育、治療観察、評価活動のトレーニングを実施	終了
SF758	1999年8月12日	16,020,915ドル	①OEPA：ブラジル、エクアドル、グアテマラ、メキシコ、ベネズエラ／アフリカ：エチオピア、ナイジェリア、ウガンダ（オンコセルカ症の治療）、エチオピア、スーダン（トラコーマ治療） ②メクチザン配布によるオンコセルカ症抑制、SAFE戦略のF要素に重点を置いたトラコーマ抑制	継続中
SF760*	1999年8月12日	250,000ドル	①エチオピア、ナイジェリア、ウガンダ ②事業NO.SF758を補完し、地元ライオンズの活動資金（地元への宣伝費、プロジェクトの監視費、地域の会議への旅費など）として使用	終了
SF811*	2000年8月10日	2,666,731ドル	①カメルーン ②9,077,450個のメクチザン処方薬を提供するために、総額の一部である891,009ドルをカーター・センターThe Global 2000 River Blindness Program(GRBP)に譲渡。協働NGO：ヘレン・ケラー・インターナショナル(HKI)、International Eye Foundation(IEF)、Sight Savers International(SSI) と連携	終了
SF976	2002年8月21日	3,790,000ドル	①スーダン ②メクチザン処方薬3,422,156個を提供、健康管理従事者のトレーニング、衛生教育、監視、評価活動	継続中
SF1123	2004年8月10日	2,000,000ドル	①OEPA ②1年間のメクチザン処方薬投与を通して南北アメリカからオンコセルカ症の撲滅	継続中
SF1072 /SF1203*	2006年1月9日	3,100,984ドル	①カメルーン ②カーター・センターに1,005,045ドル拠出。SF811と共に複数のパートナーとの共同プロジェクト	継続中
SF1193	2006年5月16日	2,000,000ドル	①エチオピア、ナイジェリア、スーダン ②ナイジェリア、エチオピアでメクチザン処方薬の配布によるオンコセルカ症抑制（671,400ドル）。エチオピア、スーダンでSAFE戦略のF、Eに重点を置いたトラコーマ抑制	継続中
SF1369	2007年8月9日	3,125,822ドル	①エチオピア ②1年間にわたるオンコセルカ症抑制（371,403ドル）、2年間にわたるアムハラ地域の全地区におけるトラコーマ抑制（2,754,419ドル）	

※ライオンズ - カーター・センター視力ファースト事業は、トラコーマ、オンコセルカ症撲滅のためにLCIFから拠出された視力ファースト交付金38,401,024ドルのうちの64.9％を占めている

●アフリカ

交付金の6割を投入する失明との戦いの主戦場

世界の失明者の8割は発展途上国に暮らす人々が占めている。そしてその8割は、予防や適切な治療をすれば視力を失わずに済むはずのものだ。

アフリカ、特に地球上で最も貧しい地域の一つとされるサハラ以南のアフリカには、500万～600万人の失明者と1600万～1800万人の視覚障害者がいると言われている。あるいは確認されていないだけで、もっとずっと多いのかもしれない。しかしこの地域の多くの国々では、近年目立って深刻化しているHIV／エイズの対策に追われ、予防可能な失明防止に当てられる国の資金は、残念ながらないに等しい。

それ故ライオンズクラブとLCIFは、こうした国々で視力ファースト事業を展開し失明と戦うのだ。2006・07年度を例に見ると、視力ファースト交付金の年間拠出総額1853万ドルのうち、アフリカにおける事業への拠出が6割を占めた。エチオピア、マリ、ケニア、コンゴ、ナイジェリア、タンザニア……。「カーター・センターとの協働」で紹介した、トラコーマ

とオンコセルカ症撲滅に向けた活動だけではない。白内障キャンペーン、眼科センターの建設、眼科専門家のトレーニング、小児眼科センターの設置など、さまざまな戦法による失明との戦いが繰り広げられている。

スワジランド

アフリカ南部、南アフリカの中に埋め込まれたように位置する四国程の大きさのスワジランドには、ライオンズクラブがただ一つ存在する。このクラブが国の厚生省と協力し、視力ファースト事業として白内障手術の拡大に取り組み、成功を収めている。

世界中の失明者の約半数は白内障に起因している。白内障は失明の最大の原因なのである。スワジランドでも然り。5500人もの人々が手術を望み順番を待つ一方、同国には眼科医が一人しかおらず、実施される手術は年間800件。病院がある都会まで出られない地方の人、あるいは手術代を準備出来ないために諦めざるを得ない人も多かった。

そこでライオンズは、唯一の眼科医、Drジョナサン・ポンスと強力なタッグを組んだ。民生委員を指名し地方の村々に派遣、白内障検査のキャンプを実施した。発見した患者は病院へ移送し、無料または廉価で手術を施すシステムを作り上げた。

「白内障手術の件数は倍増しました。20年ぶりに視力を取り戻した人もいます。そうした患者の喜ぶ顔を見るのは我々にとっても、この上なくうれしいことなのです」

と、プロジェクト運営管理者であるライオン ボルジェスは語る。

失明し絶望の淵にある人。しかし、壁の紋章はライオンズが彼らに希望の光をもたらすことを象徴している

ライオンズは子どもたちの視力を守るという、素晴らしい機会を手にしている

ケニア

ケニアの首都ナイロビに設立されたライオンズ視力ファースト眼科病院もまた、国全体に大きな恩恵をもたらしている。ライオンズが病院の運営、経営まで担う。

開院したのは1994年。以降、その設備、患者数及び実施されるプログラムなど、多方面で著しい発展を遂げた。スワジランドと同様、郊外の村で検査キャンプを行い患者を発見する他にも、大学院生を対象とした眼科医療のトレーニングや光学工場の経営などにも着手し、視力保護の基盤を広げている。現在は来院患者数が年間9万人以上に上るのだが、90％の手術や処置が無料で行われる。白内障手術の件数においては国内の37％を同病院が担っている。

ケニアやスワジランド、世界中でライオンズが実施している白内障手術に掛かる費用の平均は、1件当たりわずか6ドルに過ぎない。しかし視力を取り戻した人々にとって、それは限りなく大きく貴重なものである。

●ラテンアメリカ

視力回復から予防への転換

アフリカで視力を守る戦いが精力的に続けられているのに対し、ラテンアメリカは取り組みの成果が現れ、沈静化しつつある地域と言えるだろう。同地域へはこの15年間に計2400万ドルの視力ファースト交付金が承認され、342件の事業が展開されてきたのだが、2006年度の交付はグアテマラとブラジルの白内障手術キャンペーンへの3件、総額18万ドルのみ。例えばコロンビアでは、以前は4年間も待たなくてはならなかった白内障手術が、今は待たずに受けられるようになった。アルゼンチンでは白内障手術キャンペーンをメーンに実施してきたが、今後は予防教育に力を入れたプロジェクトを展開していく予定だ。

子どもの視力と命を守るために

ライオンズが展開している視力ファースト事業の一つに、世界保健機関（WHO）との協働による回避可能な小児失明の廃絶プロジェクトがある。LCIFは視力ファースト交付金375万ドルを拠出し、世界30カ所に小児眼

科センターを設置した。ラテンアメリカではアルゼンチン、ブラジル、コロンビア、キューバ、エクアドルに建設され、子どもたちの眼科検査や眼科ケア専門家のトレーニング、学校や地域への指導などが行われている。

　世界では毎分12人が視力を失っていて、その中の1人は子どもである。つまり1分間に1人、1年間では50万人以上の子どもが失明していることになる。子どもたちを襲う失明の悲劇は大人以上に深刻である。暗闇の中で生活しなければならない年数が長いというだけではない。この子たちが奪われるのは視覚だけではないのだ。発展途上国では、視覚障害を持つ子どもの90％は就学の機会を失い、結果社会に貢献するチャンスも極めて少なくなる。更に失明すると1年以内に命を落とす確率が60％にも跳ね上がる。

　しかし、小児失明の半数以上は回避可能なものなのだ。

　小児眼科センターで定期的に検査を受けた子どもたちは、引き続きの治療が必要ならば病院へ紹介される。既に視覚障害のある子どもたちを対象に、低視力の原因を特定・治療するプログラムを開設したセンターもある。小児眼科を専門とする多くの視力ケア・チームがトレーニングを受けたし、教師が学校で行える視力検査方法を学んで実施、より多くの子どもたちの眼病を発見する機会を設けようというプログラムも実施されている。

　センターでは主要な眼病治療の強化や、外科技術の向上、治療についての情報提供など、常により高いレベルで役割を全う出来るように目標を掲げている。

視力ファースト事業により、視力を取り戻して喜ぶアルゼンチンの子どもたち

メキシコ・チアパス州のはずれに位置するバリオ・ブラジル村。この小村でも視力ファースト事業が実施された

あなたが30人を救う

　視力ファーストが取り組む主要事業には、カーター・センターとの協働や白内障関連事業、小児失明撲滅の他に、次のものがある。主要先進国における失明の主原因となっている糖尿病性眼病を回避するためのライオンズ・アイヘルス・プログラム。世界で最も人口の多い中国における失明予防、視力回復活動である中国行動計画。

　視力ファーストは事業がスタートした１９９０年から現在までに、世界90カ国における９００の事業に２億１１００万ドルを拠出、７３０万人の白内障患者の視力を回復、２千万人を失明の危機から救ってきた。この偉大な事業を継続するために、現在世界中のライオンズが視力ファーストⅡキャンペーン（ＣＳＦⅡ）を通じて資金調達に取り組んでいる。

　ＣＳＦⅡで集められた資金で実施される視力ファースト事業により、３７００万人の視力が守られると試算されている。これは世界中の１３０万人に上るライオンズ会員が、１人当たり30人の視力を守る計算になるのである。

世界の失明防止に着実な成果を上げる視力ファーストとライオンズ

視力ファースト諮問委員
北海道大学大学院教授
大野重昭

予防または治療可能な失明を防止するために、LCIFは発展途上国を中心に世界各地から提出された事業申請に対して、視力ファースト交付金を出し、その視力保護活動を支援している。交付事業は、年3回開催される視力ファースト諮問委員会の承認によって決定する。委員会のメンバーは、LCIF理事長ら協会執行部から7人とWHOなど世界的な眼科の専門家7人の計14人。そのメンバーの一人である大野重昭博士に、視力ファーストの成果と世界の失明防止の現状を聞いた。

真剣で厳しい、執行委員会の審議

予防可能、治療可能な失明を防ぐため、明確な目標と計画を持った事業に対して援助を行う視力ファーストのシステムは、大変貴重なものだ。

これまでに出席した二度の視力ファースト諮問委員会では、世界中から集まった申請一つひとつに対して非常に真剣に議論が交わされた。交付された資金では、それぞれの地域で失明予防に向けて着実な活動が進められている。

委員会では、認可事業の再評価も重要な項目になっている。プロジェクトの多くは長期的なもので、継続して申請が出される場合が多い。当初の目標に対してどれだけの成果が上がったか、当事者の自己評価だけに頼らずに委員会で厳しく検討し、十分な評価が得られなければ減額したり、却下することもある。

しかも、これは専ら業績に対する評価であって、申請した国や誰が推しているかといったことを抜きに、客観的で公平な審議がなされている。ライオンズの皆さんの献金は、実に無駄なく有効に使われていると実感した。

失明予防の取り組みで眼科医に出来ることは限られている。眼科医に加えて看護師や視能訓練士、地域の保健師などによるコミュニティー・ケアのチームワークが、失明の予防につながっていく。そして、そうした活動はまず資金的な援助があって初めて可能になる。私自身、調査で訪問した地域で何とか手を打たなければと思いながら、資金的バックアップがないために悔しい思いで引き返してきたことが度々ある。委員会の一員となり改めて、視力ファーストの意義と重要性に対する認識を新たにしている。

勝利を収めつつある オンコセルカ症との戦い

世界の失明者の約75%は発展途上国に暮らしている。中でもサハラ以南のアフリカは最も失明率が高く、先進諸国の０・３%を大きく上回る１・４%。しかも失明者の80%は予防や治療が可能な原因で視力を失っている。この地域では眼科医が人口１００万人に対して1人しかいない。日本では1万人に1人の割合だ。

アフリカでの調査データを見ると、主な失明原因のうち白内障は横ばい、緑内障が増加しているのに対して、80年代には深刻な問題だったオンコセルカ（河川失明）症は着実に減少している。この病気は感染を媒介するブヨを減らすこと、例え感染しても薬を服用すれば失明を防ぐことが出来、視力ファーストはその撲滅のために薬の配布を続けてきた。オンコセルカ症の減少には視力ファーストが大いに貢献しており、まさにライオンズの勝利と言えるだろう。

緑内障の増加については、眼科医療の恩恵が少しずつ広がることによって、これまでより患者を見つけられるようになったことが要因と考えられる。本来は予防や治療が可能な病気であって

1990年から現在までの

視力ファースト・プログラムの成果

- 90カ国における896件の事業に対して2億1,100万ドル交付
- 730万人の白内障手術を実施
- 2,000万人が瀕する深刻な視力喪失の危機を予防
- 数億人に対する視力ケア・サービスの向上
- 1億1,410万件のオンコセルカ症の処置を実施
- 300の眼科病院／クリニック／病棟を建設あるいは拡張
- 337の眼科センターの設備を改善
- 115施設に管理トレーニングを供給
- 34万5,000人の眼科医、眼科看護師、その他の眼科ケア・ワーカーや地元のヘルス・ワーカーの訓練
- 世界保健機関（WHO）とのパートナーシップで、世界で初めてとなる小児失明との戦いに着手。30の小児眼科センターが設立あるいは改善され、7,100万人の子どもたちがその恩恵を受ける

▼ラオスでは視力ファースト交付金によって白内障手術キャンペーンが実施された他、眼科病院などが建設された。写真は2006年8月に開設された首都ビエンチャンのサテライト・クリニック

も、100万人に1人しか眼科医がいないような状況では対処のしようもない。そのため、医療施設の整備や人材育成が急務となる。

これは有名な話で、ジンバブエの「トラディショナル・ヒーラー」と呼ばれる伝統的な治療師に基本的な眼科の医療知識を教育したところ、非常に有効だったという事例がある。

視力ファーストでも、眼科医、看護師などの育成や医療設備の整備に資金が交付されている。最も良い例として、タイのコラート・コース（主任：順天堂大学眼科・紺山和一博士）が挙げられる。ここでは眼科医の他、看護師や助産師、保健師など、周辺諸国から集まった若い人たちが寝食を共にしながら研修を受けている。私もこれまでに何度か講義させて頂いたが、みんな本当に熱心に学んでいる。これまでにこのコースで学んだ若者は数百人に上り、それぞれの国に帰って地域の失明予防のために力を尽くしている。こうした人材育成が他の国々でももっと増えていくことが期待される。

世界の視覚障害の状況

2002年にWHOが発表した報告によると、世界の視覚障害者は1億6100万人で、そのうち3700万人が失明している。視覚障害者の多くは高齢者で、50歳以上の失明者は3千万人に上る。また、男性より女性に失明の危険が高いというデータもある。これは女性の方が眼病に掛かりやすいということではなく、地域によっては男女格差が大きく、女性が診察や治療を受ける機会が少ないことが原因と考えられる。

失明原因の第1位は白内障（47・8%）。2位が緑内障（12・3%）で、以下、加齢黄斑変性（AMD／8・7%）、角膜混濁（5・1%）、糖尿病網膜症（4・8%）、小児失明（3・9%）、トラコーマ（3・6%）、オンコセルカ症（0・8%）となっている。

最大の原因である白内障は高齢になれば誰もがなるもので、予防は難しい。しかし手術さえすれば視力を取り戻すことが可能なので、それ程心配な問題ではない。緑内障の場合はいったん進行してしまうと回復が難しいが、治療によって進行を予防することが出来、早期発見が鍵になる。日本ではこの緑内障がトップ、糖尿病網膜症がそれに続き、他の先進諸国でもこの二つが失明原因の上位を占めている。

近年、中途失明の原因として欧米諸国で大きな問題になっているのがAMDだ。網膜の黄斑部という場所に異常が起こり視機能が低下する病気で、名前の通り加齢によって起こる。これは原因が不明で、進行を抑えることは可能だが確実な治療法はない。はっきり分かっているのは、老化によるものであることと、喫煙が危険因子であるということだ。私が医学部を卒業した38年前は、欧米にこんな眼病があるという程度で、日本には例のない病気だった。しかし20年程前から日本でも増加

大野重昭

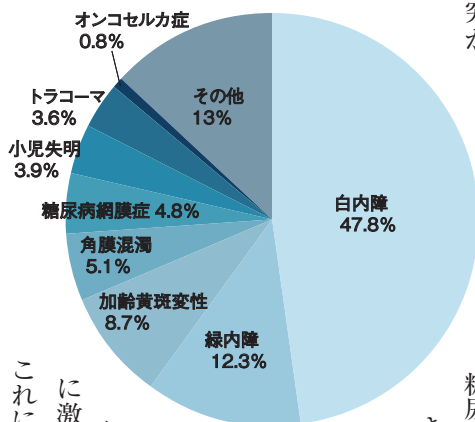
眼科医、医学博士

北海道大学大学院医学研究科医学専攻感覚器病学講座眼科学分野教授、前北海道大学病院副病院長。07年6月から視力ファースト執行委員会委員。

ベーチェット病の臨床及び研究の第一人者で、ベーチェット病患者を主人公にした、さだまさし原作の映画「解夏」の医学監修を担当。

●世界の主要な失明原因

世界保健機関（WHO）
2002年世界の視覚障害者に関するデータより

してきている。理由の一つには寿命が延びたことが挙げられるが、糖尿病と同じく、食生活の欧米化による影響も大きいと考えられる。このところアメリカで研究が進んできて、抗酸化ビタミンが有効であること、魚中心の食生活が良さそうだということが分かってきた。AMDは既に中国やインドでも増えており、糖尿病網膜症と共に今後憂うべき大きな問題になると考えられる。

一方で、失明原因の第7位となっているトラコーマは、95年の調査の2位から大きく順位を下げた。水道や下水など生活環境の改善や衛生知識の向上で、クラミジア感染による急性トラコーマは世界的に激減。オンコセルカ症と同様に、これにも視力ファーストが大きく貢献している。ただしトラコーマに関しては、新たな問題が生じている。過去40年前あるいは50年前にトラコーマに感染した人たちに起こる合併症だ。高齢になると以前の感染の傷跡が引きつってまぶたが内側に入り、まつ毛が角膜を傷つけるケースが出てきた。これは手術によって治療することが出来、視力ファーストでもこの手術プロジェクトの申請が増えてきている。

全体で見ると、トラコーマやオンコセルカ症といった感染症が克服の方向に向かう一方で、加齢による眼病が失明原因の上位を占めるようになった。今後注目すべきは屈折異常や先天性の疾患による小児失明だろう。外界からの情報の80%以上は眼から入ってくる。強度の遠視や乱視などの異常を幼いうちに見つけて、眼鏡やコンタクトレンズを処方してやることが必要だ。視力ファーストでも既に小児に対する事業が始まっている。将来ある子どもたちの眼を守る活動に着手していることを、非常にうれしく思っている。

クオリティー・オブ・ライフの向上

視力はQOL（クオリティー・オブ・ライフ／生命、生活の質）の向上に重要な要素である。例えば、高齢者が転倒によって大腿骨骨頭を骨折し、歩けなくなって、結果的には寝たきりにつながるケースがある。アメリカでの調査で、白内障手術を受けたグループにはこの骨折が少ないというデータが出た。当然のことながら、白内障が治って視界がはっきりすることで転倒の危険が回避された結果である。これはほんの一例だが、視力の回復はただよく見えるようになるというだけでなく、その患者のQOLに大きく影響している。見えることで精神面にも多大な変化があり、より多くの情報が得られることが刺激になって、痴呆の予防にもつながっていく。視力を守ることは世界、とりわけ途上国の人々に大きな喜び、楽しみを与える活動なのだ。

もちろん国際的な活動だけでなく、日本国内におけるライオンズクラブの貢献は非常に大きく、特にアイバンク、角膜移植に関しては、ライオンズの援助なくして活動出来ない程だ。ライオンズの皆さんには、国内での活動と共に、視力ファーストという国境を越えた活動にも尽力しておられることを、誇りにして頂きたい。

長年にわたり失明予防に取り組んでこられたライオンズクラブに対して、心からの感謝を表すると共に、今後も末永い支援を続けて頂きたい。（談）

福井正憲

■国際理事会アポインティー／元国際理事／視力ファーストⅡキャンペーン国際委員

（京都府・山城ライオンズクラブ）

残り半年となった視力ファーストⅡキャンペーン（CSFⅡ）

国際的奉仕団体ならではの活動にかかわり、感動を共有するために

2005年から始まったCSFⅡも、いよいよラストスパートの時期を迎えた。日本は独自の計画により順調にキャンペーンを展開、既に目標額の約8割を集め、ここまで世界をリードしている。が、会員減少という、キャンペーンそのものとは別の次元で、日本の成功を脅かしかねない要素も出ている。その辺りの事情も踏まえ、福井正憲国際委員に見通しを伺った。

―日本はキャンペーン期間の4分の3に当たる10月時点で、実際の受領額が、目標の約78％に到達しました。

「ここまで順調にきている背景には、日本独自のキャンペーン計画を持てたことがあります。

国際協会が立てた3カ年計画に基づけば、組織作りや啓発活動に2年を費やし、最後の1年で献金を集めることになっていました。が、それでは最終年の負担が大きいので、日本は3年間均等にいくということを協会に認めてもらい、独自の方式で進めてきました。

この方法が採れたのは、日本の地区組織がしっかりしているからです。世界的にはCSFⅡのための別組織を一から構築したわけですが、日本は既にある地区組織の中でキャンペーンを展開し、各レベルのコーディネーターはそれをサポートするという形を取りました。また、協会から予算を獲得し、CSFⅡ専用の事務局を設置出来たことも大きかったと思います。

他にも日本の提案で、協会が考えていたモデルクラブ制度に修正を加え、より多くのクラブが参加しやすい形に変えてもらいました。具体的には、日本の一人当たりの平均目標額（405ドル）に近い500ドルが、モデルクラブの条件となったことで、日本のクラブ

の参加意欲が高まり、結果的にＣＳＦⅡの牽引役を果たすことになりました。
　ただ、こうした制度的な面は私たちの側で整備しましたが、最終的には地区ガバナーを始めとする地区役員、そして各クラブ会長の努力のたまものです。誌面をお借りして、改めて皆さんに感謝申し上げます」

――日本以外はこの１年が勝負となるわけですが、見通しはいかがですか。

「日本だけではなく、韓国もテーサップ・リー国際委員長の下、初年度から献金をスタートさせたので、現在まで日韓両国でキャンペーンを引っ張っている形になっています。また、前回のＣＳＦⅠではあまり実績が上がらなかったインドも、今回はかなりがんばっています。インド、韓国とも国際会長を輩出して会員数が伸びており、アメリカ、日本に次ぐライオンズ大国にふさわしい努力をされているように見受けられます。
　しかし、全体的に言うと、会員数の減少もあって、目標達成は決して楽観出来る状況ではありません。これは、ここまで順調に進んできた日本にも言えることです。
　日本は一人当たりの平均目標額ということで言えば、まず間違いなく目標を達成すると思います。が、この数字は当時の会員数12万6千人に基づいて設定したものです。現在はこれが11万6千人と大きく減少しています。従って今後の展開によっては、総額では目標額に届かない心配も出てきました」

――何か対処法はあるのでしょうか。

「一つには、出来るだけ多くのクラブが、モデルクラブを目指してほしいということですね。また、ＣＳＦⅠではメルビン・ジョーンズ・フェロー（ＭＪＦ）の千ドル献金が主だったのですが、今回はよりハードルの低いモデルクラブという目標があるため、ここで満足してキャンペーンを終了させてしまったクラブが多いようです。そうしたクラブは更にＭＪＦを目指して、ラストスパートをかけて頂きたいと思います。
　それと共に、我々がなぜＣＳＦⅡを展開しているのか、根本的な部分について、ご理解を頂きたいですね。
　11月初旬、スリランカで開催された世界視力デーに出席しました。国際会長を始め協会の主要メンバーと共に、視力ファースト事業で建てられた病院や設備を視察し、白内障手術にも立ち会いました。そこで私は、我々が拠出した資金が有効に活用され、実際に失明を防止するための大きな役割を担っていることを目の当たりにしました。
　今、日本にも多くのＮＰＯがあり、その気にさえなれば、さまざまなボランティア活動に取り組むことが可能です。しかし、ライオンズクラブには、そうしたＮＰＯとは大きく異なる点があります。それは、世界最大の国際的な奉仕団体であるということです。そして、そのメリットを最大限に生かしているのが、視力ファーストです。
　皆さんもぜひ、ライオンズとして、このような世界的な活動にかかわれることの喜び、感動を味わってもらいたいと思います。イギリスの経済紙『フィナンシャル・タイムズ』が、ＬＣＩＦを世界一のＮＧＯと格付けしたのもダテではないのです。金額の多さではなく、内容が評価されたわけです。その辺りをきちんと認識してください。
　ＣＳＦⅡはそのための資金集めなのです。我々ライオンズの顔となる事業を進めるための活動なのです。皆さんの更なるご協力をお願い致します」

●CSFⅡ地区別標準目標達成率（2007年10月末現在）
※各地区自主目標とは異なります

地区	達成率（%）
331-A	117.2
331-B	47.8
331-C	57.2
332-A	68.7
332-B	94.0
332-C	66.3
332-D	82.4
332-E	73.5
332-F	47.6
330-A	73.6
330-B	60.0
330-C	81.3
333-A	59.5
333-B	49.6
333-C	62.2
333-D	36.8
333-E	60.1
334-A	148.2
334-B	95.5
334-C	64.1
334-D	64.8
334-E	71.5
335-A	68.5
335-B	85.1
335-C	98.2
335-D	54.4
336-A	63.4
336-B	76.5
336-C	85.4
336-D	61.9
337-A	114.3
337-B	83.6
337-C	77.9
337-D	65.2

国際理事会のみなぎるパワーにびっくり

■国際理事
重松良次
（大阪府・茨木）

今年度第2回目の理事会は9月27日～10月1日、インドのデリーで行われました。シカゴでは閉会式後の1日だけの会合でしたので、実質的には今回が最初の会議です。

JALの機内では到着前にマスクとのど飴を頂いたのですが、デリーに着くとその意味がよく分かりました。街はほこりでいっぱいでした。のどがいがいがして、終戦後の日本と全く一緒で車と人であふれていて、すごい所に来たなと思いました。空港からホテルまで40分ぐらい車で移動すると、ホテル近郊は高い大きな樹がいっぱいのすばらしい場所で、やっと一息つけました。

いよいよ翌日からLCIF執行委員会です。日本を出る10日前に家に届いた500～600ページもあるLCIFの申請書の束を前に、この一件ずつを1日の会合で処理することは不可能だと思って、どんな方法で行うのか心配でなりませんでした。当日は朝9時に会議が始まり、LCIFのレベッカ部長から、500件の内350件は1万ドルを上限に審査なしで交付される緊急援助交付金であると報告を受け、やっと心配事が片づきました。残る150件の内50件は基準外で交付されませんと報告があり、審査対象となるのは100件でした。これらは一つずつレベッカ部長が読み上げて申請理由が報告されました。私には本部スタッフの大石さんが通訳についてくれたので、会議そのものは問題はありませんでした。が、昼食に休みを45分取っただけで朝9時から夕方5時までずっと説明を受け、学校で授業を受けるよりはるかにきつい一日でした。アメリカ人（レベッカ部長）のスタミナにはびっくりしてしまいました。

第2日目、理事会全体に対し、マヘンドラ・アマラスリヤ国際会長がその方針を説明されましたが、会長も9時から5時までずっと立ちっぱなしで話をされ、そのパワーに驚くばかりでした。

第3日目は、私は大会委員会の委員として会議に出席。同委員会委員長はロブレスキー元国際会長ですし、本部大会部のオービン部長もいらしていて、大阪国際大会の頃から見知ったお顔を拝見して少し気の休まる思いでした。タイのバンコクで行われる第91回国際大会のメーン会場の説明や本部ホテルの発表、ホテルの総予約数やパレード・ルートの報告が行われました。バンコク大会で最も懸念される問題は交通マヒであると言われておりましたが、最近は地下鉄が出来て緩和されていると報告がありました。また、第90回シカゴ大会のパレード・ルートは中心部から離れていたため、一般市民の皆さんの参加が少なかったという反省が報告されました。

第4日目は全体会議で各委員会の報告事項が発表され、いろいろな意見が飛び交いました。初めての理事会は大変充実しておりましたが、本当に疲れたし、大変だったなというのが正直な私の感想です。同理事会の決議事項要約は本誌12月号に掲載されています。

バンコク大会ホスト委員会は、日本からの多くの参加者を期待していますので、皆様どうぞ今から計画を立ててください。本誌でも1年間にわたり「バンコク国際大会情報」を掲載。さまざまな情報を紹介しています。

台北で上位ライオンズ・リーダーシップ研究会開催

11月15～19日、中華民国（台湾）台北市の王朝大酒店において、東洋・東南アジア（OSEAL）地域の上位ライオンズ・リーダーシップ研究会（SLLI）が開催された。研究会はOSEAL地域内の各国から98人が参加、英語、日本語、中国語、韓国語の言語ごとにグループ分けされ進められた。

国際協会は各レベルにおけるリーダーシップ育成を重視し、これまでにさまざまなセミナー、研究会を実施。最近では公式ウェブサイトに「リーダーシップ情報センター（www.lionsclubs.org/JA/content/news_train.shtml）」を設け、オンラインで学習出来る環境も整えている。

このうちSLLIは毎年会則地域ごとに開催しており、今年で9年目を迎えた。これまでに日本からは約300人の会員が受講、今回は全国から25人が参加した。日本語グループは林護333複合地区議長、坂井正前333・A地区ガバナー、団英男335・A地区指導力育成・会員研修委員長の3人が講師を務め、「指導力の変化」「プレゼンテーション」「ライオンズの基本」「多様性」「独創性」「紛争（対立）解消」「コミュニケーション」「われわれは奉仕する」「LCIF」「チーム支援」「プロジェクト（事業）管理」「メンター」のテーマで、それぞれ2時間ずつ講義を担当した。受講者はホテルに缶詰状態になりながら、5日間にわたってライオニズムの知識、リーダーとして必要な技能、奉仕の精神などを習得。また、日本を始め各国のライオンズと情報交換をすることで、大きな収穫を得ることが出来たようだ。

昨年度、最も多かったアクティビティは高齢者支援

国際本部に提出された2006・07年度月次／年次アクティビティ報告の集計によると、1クラブ当たりの奉仕時間は年間719時間で、世界で約3200万時間、アクティビティ金額は1クラブ当たり平均1万3568ドル、世界で6億500万ドルだった。

最も多くのクラブが実施した奉仕事業は高齢者支援。全体の50％のクラブが、眼鏡や補聴器の寄贈、高齢者世帯の家事手伝い、医療機関への送迎などの奉仕活動を実施した。会則地域別に見ると、アメリカ及びその周辺では中古眼鏡収集（59％）、カナダ、メキシコ・中南米・カリブ海諸島、ヨーロッパ、大洋州及びその周辺は高齢者支援（順に47％、55％、43％、58％）、インド・南アジア・アフリカ・中東は視力検査（35％）、東洋・東南アジアは献血（74％）がトップだった。日本が属する東洋・東南アジア地域の2位以下は、地域清掃（60％）、青少年レクリエーション／スポーツ（55％）、薬物乱用防止（41％）、災害救援（39％）、アイバンク（39％）となっている。

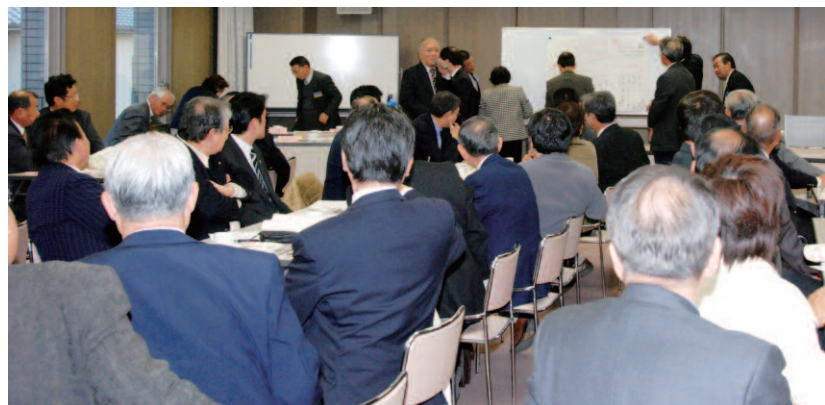
LCIFに新たなクラブ向け表彰プログラム

ライオンズクラブ国際財団（LCIF）には献金者をたたえるため、メルビン・ジョーンズ・フェロー（MJF）を始めとする各種表彰制度が設けられている。また、LCIFは基本的に個人献金だが、会員全員がMJFになったクラブに対する100％MJFなどクラブ表彰もある。特に現在進行中の視力ファーストⅡキャンペーン（CSFⅡ）では、クラブとして資金獲得事業を行い、一般から協力を得ている例も多いことから、これらの実績に対する表彰制度も必要との声が出ていた。国際理事会ではこれに応え、2006年のボストン理事会で、クラブの事業資金から会員数×千ドル以上の資金をLCIFに拠出した場合、100％MJFクラブに贈られるイエロー・フラッグに似たブルー・フラッグを贈り、LCIFフェロークラブとして顕彰することを承認した。

その第1号が、9月4日に誕生。結成20周年記念事業としてCSFⅡに拠出した福岡玄海ライオンズクラブ（高田利治会長／58人）で、更にその子クラブ、福岡花ライオンズクラブ（松山廣子会長／38人）がこれに続き第2号となった。フェロークラブは今後、周年を迎えるクラブが、記念事業としてCSFⅡを選択する際に、かっこうの目標となりそうだ。

335・D地区でテール・ツイスター研修会開催

11月22日、兵庫県姫路市の姫路商工会議所で335・D地区（兵庫県西／角田勇地区ガバナー）のテール・ツイスター研修会が開催された。会員減少が続く中、会員の維持にはクラブ例会の充実を図ることが重要と、例会の盛り上げ役であるテール・ツイスターの活躍を促すために実施したもの。

研修会では外部講師による「話し方のポイント」の講演に続き、参加者70人を10テーブルに分けて、例会の演出についてグループごとに討議。その内容をチャートにまとめて各チームの代表が発表した。角田ガバナーは研修会の成果について、「指導力育成委員会では当初、講師による一方通行の研修会を考えていたようだが、全員参加型の方式を採用したことで皆真剣に取り組んでくださり、大いに盛り上がった。テール・ツイスターの仕事については、ドネーションの発表だけ、例会の時間が余った時にマイクが回ってくる、前任者の真似をしているなどの声が多かったが、研修会終了後はその責任の重要性が分かったという声が多かった。参加者が今後、例会のマンネリ化打破に向けて活躍してくれることを期待したい」と話している。

ライオン誌創刊50周年記念論文の受賞者決定

11月5日に開催されたライオン誌日本語版委員会において、『ライオン』誌創刊50周年記念論文の最終選考が行われ、応募総数56点の中から左記受賞者が決定した。表彰は08年3月3日開催の「ライオン誌創刊50周年記念の会」で行われる。また最優秀賞、優秀賞を受賞した作品は『ライオン』誌50周年記念誌（2月20日発行／本誌3月号と同時配布）に掲載。

最優秀賞：村上紘一郎（京都）

優秀賞：上条壽男（東京都・多摩グラッド）／石橋隆志（神奈川県・川崎）／久岡英樹（大阪府・豊中千里）

入賞：藤村貞夫（東京三軒茶屋）／一瀬茂（山梨県・市川大門三珠）／石邑義幸（北海道・帯広）／中島達雄（岩手県・水沢）／堀泰彰（岐阜県・可児）／赤尾寿夫（福井県・小浜）／清水直喜（福井県・敦賀みなと）／田中實（兵庫県・明石）／横田芳昭（京都府・舞鶴）／天崎俊章（広島ニューシティ）／田崎登保（宮崎県・日向）

ライオン誌版
ライオンズ検定
第1回

〈第1問〉国際協会のモットーは？

a「わたしは奉仕する」
b「われわれは奉仕する」
c「われわれは支援する」

〈第2問〉スローガン（英文）の頭文字をとって「LIONS」。Iは何の頭文字？

a Identity
b Imagination
c Intelligence

〈第3問〉「われわれは知性を高め、友愛と○○の精神を養い、平和と自由を守り、社会奉仕に精進する」（「ライオンズの誓い」）。○○に入る言葉は？

a 相互理解　b 相互扶助
c 国際理解

〈第4問〉「ライオンズクラブ国際協会の目的」の一文、「地域社会の生活、文化、福祉および○○の向上に積極的関心を示す」。○○に入る言葉は？

a 愛国心　b 公徳心
c 好奇心

〈第5問〉国際協会の紋章で、それぞれ別の方向を向いた2頭のライオンたちが見ているものは何？

a ライオンズの理想と現実
b ライオンズの歴史と未来
c ライオンズの目的と業績

〈第6問〉国際協会の色は2色。一つは金色、もう一つは何色？

a 赤　b 青　c 紫

〈第7問〉国際協会を構成する「会員」とは何を指す？

a 地区
b クラブ
c 会員

〈第8問〉クラブの結成及びチャーターの権限を持つのは？

a 国際会長
b 国際理事会
c 地区ガバナー

★正解7問以上でA級、4～6問でB級、3問以下はC級に認定します。

★正解は26ページに掲載。

バンコク国際大会オンライン登録スタート

第91回国際大会（08年6月23日〜27日／タイ・バンコク）のオンライン登録の受け付けが、公式ウェブサイト（www.lionsclubs.org）でスタートした。画面上の書式（英文のみ／写真参照）に氏名、地区名、Eメール・アドレスなど必要事項をローマ字入力し、簡便に登録手続きが可能。必要に応じてMJF昼食会など有料行事の申し込みやホテル予約も出来る。支払いはクレジット・カード決済となる。FAXまたは郵送で申請書を送付して登録する場合は、公式サイトから申請用紙をダウンロードして必要事項を記入、用紙に記載された送付先に送る。この場合、登録料の支払いはクレジット・カード決済か、国際協会への会費納入と同じ振込用紙で国際協会日本事務所が管理する口座へ振り込む。

バンコク国際大会の日程や登録に関する情報は、公式ウェブサイトのトップページ「行事予定」にある「国際大会」ページに掲載。

会議録

第4回複合地区ガバナー協議会議長連絡会議（10月26日／パレスホテル2階「桐の間」／出席者：古郡保郎、秋庭一富、松田則保、林護、曽我一義、小林登、加計邦夫、不老安正各議長、谷野徹、後藤隆一、重松良次各国際理事、福井正憲アポインティー）①国際役員との懇談②第46回OSEALフォーラム報告書③「配偶者会員招聘のための行動指針」について④ライオンズクエスト・プログラムについて⑤各委員長連絡会議・委員会報告⑥その他

第2回複合地区YE委員長連絡会議（10月30日／日本ライオンズ連絡事務所／出席者：今井三和、佐々木哲夫、長嶺賢二、飯塚信一、前田忠久、長谷川忠良、松本正福、西野勇男各委員長）①冬期交換②YE書籍頒布について③2007-08年度予算案④春期・夏期交換情報

第4回ライオン誌日本語版委員会（11月5日／ライオン誌日本語版事務所／出席者：谷野徹、後藤隆一両国際理事、渡邊豊隆、古谷野環、坂井正、小岱義正、松田毅、山根健、井村一男各委員、荘英隆、小柴登司両ITアドバイザー）①11月号（10月20日見本／11万7500部発行）出来②12月号記事内容の確認③08年1月号以降台割（案）と主要記事予定④ウェブサイト関連⑤オンライン報告システムServamA⑥創刊50周年記念関係⑦その他

第3回複合地区国際大会委員長連絡会議（11月6日／パレスビル3階会議室／出席者：菅原雅雄、竹内武司、佐々木公穂、関口延木、松岡忠男、川西建雄、銭村一雄、北島建則各委員長、重松良次国際理事、福井正憲アポインティー、ソムサクディ・ロヴィス第91回国際大会ホスト委員会副委員長）Ⅰ第91回国際大会（2008年6月23日〜27日／タイ・バンコク）Ⓐ基本的事項の確認Ⓑ大会参加の実務、Ⅱ東洋・東南アジア・フォーラム関係

新結成クラブ

茨城県・つくばオーク▼結成順位／3659▼10月19日結成▼大塚一浩会長▼事務局／つくば市長高野185　大塚一浩様方（〒300-3265）TEL029-864-2550▼スポンサー／土浦北

訃報

■元国際役員

ライオン**山下忠雄**（岡山県・真庭）
11月25日死去、81歳。69年入会。96年度336-B地区ガバナー。

■献眼者（2007年9月）

ライオン森田繁（栃木県・城北）／ライオン山口人志（栃木県・小山）／ライオン大賀房四郎（栃木県・宇都宮）／ライオン古井則行（熊本県・芦北）／ライオン三好二郎（大阪夕陽丘）

ライオンズ検定●第1回の回答
第1問・b／第2問・c／第3問・a／第4問・b／第5問・b／第6問・c／第7問・b／第8問・b

Executive Officers Message

執行役員メッセージ

前国際会長／
LCIF理事長
ジミー･M･ロス

青少年を優先

世界各国のライオンズクラブでは、長きにわたり青少年のプログラムを優先してきました。LCIFでは、ライオンズが児童や若者と共に活動出来る多数のプログラムや交付金を用意しています。

これまで1,100万人を超える青少年がライオンズクエストに参加し、教育者を中心に33万人以上の人々がプログラムを実施するための研修を受けています。また青少年はこのプログラムを通じてボランティア体験学習に参加し、奉仕の意義を学んでいます。LCIF交付金は、地域でのプログラム導入や拡大を希望するライオンズが利用出来ます。

日本とカンボジアのライオンズは共同で国際援助交付金を受け、学校建設や教室備品の購入を行い、識字率や教育レベルを向上させています。カナダでは薬物中毒や心理療法のための治療センターが設立されました。ルイジアナでは、ハリケーン・カトリーナの被災後、障害のある子どもたちのためのライオンズ・キャンプ場の補修が行われました。

LCIF交付金の多くが、毎年、青少年関連の事業に割り当てられています。今日の青少年のために活動を行うことで、彼らが良識ある市民となり、ライオンズクラブの会員候補としてふさわしい大人になってもらえるよう準備しているのです。

国際第1副会長
アルバート･F･
ブランデル

開かれたライオンズへ

国際大会に参加する喜びの一つに、「ライオンズの多様性を知る」ということがあります。大会はすべての民族・国・職業の男女が集う、まさに「るつぼ」です。

ライオニズムはすべての人のものであり、特に奉仕に専念する善良な人々のためにあるのです。

我々のクラブ運営についても同じことが言えます。例えば、クラブや地区によっては、女性の参加率が高いところがあります。さまざまな事情があるでしょうし、クラブの構成が必ずしもその地域の人口を反映しなければならないわけではありません。

ただ、クラブは、参加する資格のあるすべての人に開かれていなければなりません。ライオニズムには「排他」という文字はなく、「そっちはそっちのクラブを作ればいいじゃないか」といった、拒絶する態度も許されません。奉仕の精神を持ったすべての人に、ライオンズになる機会が与えられるべきです。

多様性のあるクラブは地域に貢献出来ます。異なる背景・環境を代表するメンバーがいれば、地域のニーズに的確に対応出来るでしょうし、クラブ自体も成長・繁栄するでしょう。会員増強や維持は、決して難しいことではありません。実際には、数の多さが多様性の強みを生み出すのです。

国際第2副会長
エーバハルト･J･
ヴィルフス

ライオンズの奉仕：姿勢･意志･能力

私はライオンズクラブの一員であることに誇りを持っていますが、皆さんもそうであることを願っています。

ライオンズクラブが、地域の人々にとってどれだけ重要な存在であるか、我々は常に忘れてはいけません。もちろん、政府は我々の安全を確保し、道路を整備し、食品の安全管理に努めています。

しかし、ライオンズのような組織こそ、地域のニーズを草の根レベルで解決するために絶対的に必要な存在なのです。それはハリケーン・カトリーナや津波災害の時にも明らかでした。政府が、情報を収集し対策を練っている時、ライオンズはいち早く現場に駆けつけました。

しかし、我々の活動の場は災害時に留まらず、日々続いていくものです。我々ライオンズの強みは、社会問題に取り組む断固とした意志です。ニーズを見つけ、それに応える。地域の人々は助けを求め、我々がそれを解決するのです。

この強みを決して弱めてはいけません。今この瞬間を、決断の時と位置付け、市民活動のために立ち上がりましょう。

我々は必ずメンバーや地域社会を活気づける方法を探し出すでしょう。そして我々は生まれ変わった地域やクラブのリーダーとなるのです。

「ダメ。ゼッタイ。」車両の贈呈と薬物乱用防止啓発活動

茨城県・日立中央ライオンズクラブ／協力：日立、高萩、北茨城、十王、日立桜、日立きらら、日立ブーケ各クラブ

LCIF一般援助交付金：14,457ドル／事業完了日：2007年11月2日

日立中央ライオンズクラブは、２００７年度に結成30周年を迎えるに当たり、記念事業の一環として、更にはＬＣＩＦへの関心をより高揚する意味で、ＬＣＩＦ交付金事業を計画することになった。そのために昨年度から作山英一前会長が、ゾーン内クラブに協力の働き掛けを行った。

ここ十数年来、当クラブでは青少年健全育成の観点から、薬物乱用防止啓発活動を事業の主軸に置くものと認識し推進している。そこで記念事業では、薬物乱用防止啓発用機器と車両を購入してはどうかとの案が出された。

結果、第１リジョン第１ゾーン（７クラブ）の協力が得られ、07年４月１日にＬＣＩＦ援助交付金を申請する運びとなった。

７月に国際理事会で申請が承認され、10月に機器、車両を購入。そして11月２日に、「ダメ。ゼッタイ。」とペインティングした車両を１台、日立市へ贈呈した。

啓発活動の長い道程

ライオンズの薬物乱用防止啓発活動が学校サイドに理解して頂けるまでには、長い道程があった。

１９９７年にさかのぼる。当時330‐Ａ地区と麻薬・覚せい剤乱用防止センターが共同で「薬物乱用防止教育認定講師養成講座」を創設した。その講座に力を注いでいるライオン鈴木正二に影響を受け、当クラブの会員数人が認定講師の資格を取得。啓発用の機器操作もマスターし、薬物乱用防止啓発活動の準備が整った。

しかし、警察やダルク（民間薬物依存リハビリテーションセンター）でも薬物乱用問題について各学校で講演を実施しており、ライオンズを受け入れる学校が少ないのが現状。それにもめげず我々は、何度も学校へ出向き、「この啓発活動は、既に法を犯してしまった若者に更生を促す活動ではなく、子どもたちを、麻薬・覚せい剤や向精神薬の誘惑に対し、キッパリ断ることの出来る青少年に育てることが目的」と懸命に説明を繰り返した。

他団体との連携が功を奏す

本事業の成功には、茨城県保健福祉部薬務課の協力が不可欠であった。行政と連携して事業を行うことには大きな意義を感じる。また今までに、教育委員会や保健所とも連携を試みた。その働き掛けが功を奏し、現在では認定講師の資格を持った、ライオン柴田正四郎、ライオン青木茂が中心となって、小中高生を対象に多くの講演を行っている。

今後も、ブラザー・クラブを始め、教育委員会そして地域のあらゆる団体と協力し合いながら、今回購入した啓発用機器類を十分活用し、地域の小・中・高の児童や生徒、ＰＴＡあるいは地域住民の方々に対する啓発活動（「ダメ。ゼッタイ。」運動）を推進し、ライオンズの薬物乱用防止への取り組みが更に理解されるよう活動を続けたい。

高濱正敏（会長）

SightFirst Update

ライオンズ・アイヘルス・プログラム：視力を守るために地域社会に力をつける

ライオンズ・アイヘルス・プログラム（LEHP）とは

ライオンズ・アイヘルス・プログラム（LEHP＝リープと発音）は、地域密着型の教育プログラムで、ライオンズクラブや地域の他の団体や個人が、目の健康管理を促進し、また予防可能な失明の原因について認識を向上させるためのものである。LEHPの目標は、緑内障及び糖尿病性網膜症の早期発見、適時の治療や危険にさらされている患者に瞳孔拡張検査を受けるよう奨励し、弱視の人や彼らの介護者の教育を行うことで、地域が人々の視力を保護出来るようにすることである。

LEHPは、先進国を対象にした視力ファーストの主要プログラムである。LEHPはこれまでにアメリカ、日本、イギリス、アイルランド、カナダ、オーストラリア、トルコで実施。アメリカでは現在も、活発な取り組みが展開されている（※日本では1995年から3年間にわたり、日本ライオンズ・アイヘルス・プログラムとして実施。先進国における失明の二大要因である糖尿病性網膜症と緑内障の危険性と検診の必要性を広く知らしめることで、失明の予防に努めた）。目の健康に関心がある人なら誰でも、LEHPに参加して、視力保護に対する啓発活動に貢献することが出来る。

LIONS CONQUERING BLINDNESS
SIGHTFIRST

最新情報：家庭での緑内障教育プログラムに注目

緑内障の家系は、眼病にかかる危険性が高くなる。この重要な危険要因に対し、ライオンズクラブ国際財団（LCIF）は、アイケアに特化した世界的な医薬品会社であるアラーガン社と協力し、「家庭での健康管理」プログラムを開発した。このプログラムは、緑内障と診断された人または緑内障にかかる危険性のある人が、その家族や介護者、アイケアの専門家と、治療あるいは予防に関して、より密接に協議するための国民教育プログラムである。「家庭での健康管理」は視力保護のために、緑内障の早期診断及び積極的な治療の重要性を認識してもらえるように設計されている。

全米で展開されるこの緑内障教育プログラムに対して、各ライオンズクラブが、それぞれの地域にプログラムを導入するための交付金が承認された。彼らは近々、緑内障検査及び教育のための最初のイベントを開催する予定だ。「家庭での健康管理」プログラムについては公式ウェブサイトにも情報を掲載しているので、詳細を知りたい方、また実際に緑内障にかかっている人や、彼らの家族や介護者にとって役立つ資料をダウンロードして、有効に活用して頂きたい（www.lionsclubs.org/EN/content/lcif_gr_lehp_all_eyes.shtml※現在は英語のみ）。

なぜ必要か

先進国では今まで以上に多くの人が、弱視の脅威に直面している。人口の高齢化が進むにつれ、失明する人は、この20年で倍増すると予測されている。アイヘルスの認識を高めることにより、中高年の多くは障害、自立心の損失、生活の質の低下を防ぐことが出来る。アメリカを例に取れば、現在、年間220億ドル以上が、失明に苦しむ人たちの治療やサービスに使用されている（※これらの費用には、治療、教育、個人所得の損失や社会保障身体障害保険の給付金などの関連費用が含まれる）。

アイケア資料

アイケア及び教育プログラム：アイケア・アメリカは多数のアイケア・プログラムを提供。この中には高齢者、緑内障、糖尿病、加齢黄斑変性症や子どものアイケアなどが含まれている。

糖尿病性眼病：イーライリリー社は、糖尿病性眼病の認識向上のための啓発キャンペーンを実施、視力保護のための簡単な生活改善法を提示している。

低視力：アメリカ国立アイヘルス教育プログラムには、低視力を抱えて生きる効果的な方法について指導する新しい資料や、リハビリを奨励する資料などがある。

LIONS ROAR-R-R BANGKOK 2008

バンコク国際大会情報

[微笑みの国への誘い]

第91回国際大会/2008年6月23日(月)～27日(金)

旅は訪問先のちょっとした情報を知っているだけで、ぐんと楽しさが増すものです。今回はタイとバンコクに関する豆知識を集めてみました。

●世界一長い都市名

「タイの首都は?」と問われれば、皆さん当然「バンコク」と答えるでしょう。でもこれ、正式な名前ではありません。正式名称はここに記したら6行にもわたってしまうので省略しますが、世界一長いその都市名は、バンコク朝の初代王ラーマ一世が新しい国に寄せる思いを詠じた詩の全文がそのままつけられたもの。偉大な地、戦争がない平和な、天使の都、とたたえています。行政上の公称は詩の冒頭にある「クルンテープ・マハーナコーン」、タイの人たちは「クルンテープ(天使の都)」と呼んでいます。

●月曜日は黄色の日

バンコク国際大会が開幕する6月23日は月曜日。もしこの日にタイに到着するなら、空港や町中にあふれる鮮やかな黄色に驚くことでしょう。ざっと見て、町行く人の半数近くが黄色いポロシャツ姿。そうでない人も、シャツやネクタイなど何かしら黄色を身につけているはずです。

タイでは生まれた曜日が重視されていて、曜日によってシンボル・カラーが決まっています。月曜日は黄色。そして、国民が尊敬するプミポン・アドゥニャデート国王ご生誕の曜日。タイの人たちは国王に敬意を表し黄色を身につけるのです。

ちなみに他の曜日は、火曜日はピンク、水曜日は緑、木曜日はオレンジ、金曜日は青、土曜日は紫、日曜日は赤。色だけでなく曜日ごとの守護仏像も決まっていて、寺院には月曜から日曜までの仏像が祀られています。バンコクを訪れたらぜひ探してみてください。

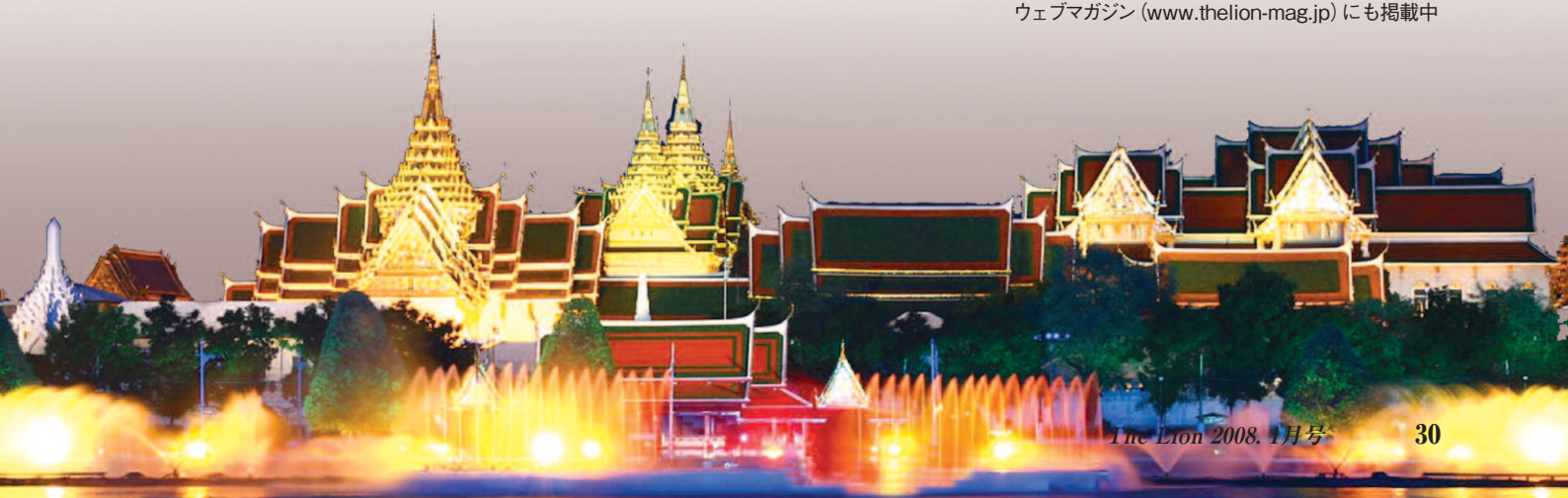
曜日ごとの仏像は水曜日のみ昼と夜があって全部で8体(左端が日曜日の仏像)

●愛と尊敬を一身に

タイ国民が王室に絶大なる敬愛を寄せていることは、よく知られるところ。街中や食堂、タクシーの中など至るところに国王の肖像が飾られています。よく見掛けるのが首にカメラを下げた写真。一眼レフ・カメラを手に熱心に全国各地を視察され、国民の生活向上のためのロイヤル・プロジェクトで陣頭指揮を執られる姿に、国民は高い信頼を寄せているのです。在位62年、昨年80歳になられたプミポン国王。1999年にはその功績をたたえてライオンズ人道主義大賞が贈られています。

◆

国際大会参加には、クラブ代議員も一般参加者も必ず大会登録が必要です。国際協会公式サイトで簡便なオンライン登録(26ページ参照)を受け付けておりますので、手続きはお早めに。

■国際大会や開催地・バンコクに関する情報は本誌ウェブマガジン(www.thelion-mag.jp)にも掲載中

SCENE

トンカチ片手に子どもたちが挑戦。遊び心が里山を守る。

石川県・金沢菊水ライオンズクラブ

■文／久保晋作　写真／田中勝明

「コンコンッ、コンコンッ」と静かな森の中で一斉に金づちをたたく音が響く。長さ1メートルのナラの木にシイタケの菌を打ち込むホダ木づくりの光景だ。

10月21日、金沢市住吉町の山林で「菊水の里 キノコの森づくり」と題した環境保全活動が開催された。里山再生事業の一環として金沢菊水ライオンズクラブ（森田憲治会長／53人）が主催、今年で4回目を迎える。約3・5ヘクタールの雑木林で、子どもたちはシイタケの植菌の他、コナラの植樹、カブトムシの巣づくりを体験した。毎年、金沢市母子寡婦福祉連合会と、一般公募で集まった市内の小学生数十人が参加して森

づくりが行われている。

「森林資源の保護と活用を目的にしていますが、子どもたちには、まず遊び心を持って自然に親しんでもらうことが大切」と森田会長は話す。そんな遊び心を通して自発性を促す趣意に賛同し、今年はボーイスカウトから120人が新たに加わった。

集合場所から森づくりの作業をする雑木林までは約20分掛けて歩く。前日の雨で少しぬかるみがあるものの、子どもたちは隊列を組んで林道を先へと進む。作業場所に到着すると、少し休憩。初年度に作られた手づくりベンチがこんな時に役に立つ。傍らには、まるで腰掛けのような大きなシイタケが育っていた。子どもたちは興味津々、俄然シイタケの植菌にやる気が湧いたようだ。

まずは、ドングリの木の一つであるコナラの苗木を植える。小型のショベルを手に湿った土をいじる姿はあどけないが、苗木を手にした表情は真剣そのもの。子どもたちは用意された苗木100株をあっという間に植え終えた。勢いそのままに次はシイタケの植菌。「シイタケ菌が詰まった種コマは原木の表面と水平に、奥まで打ち込まないように」と説明があったが、聞いているのかいないのか、子どもたちは普段手にしない金づちに夢中だ。開始の合

図と共に、原木1本につき20個程開けた穴に1個1個、種コマを打ち込んでいく。さすがに終盤は木をたたくテンポが遅くなったが、ホダ木250本が出来上がった。

スムーズに作業が進んだのもライオンズの入念な事前準備があったからこそ。専門的な技術が必要な老齢木の伐採は数カ月前に市に依頼し、取り除いておいた。当日は早朝から草を刈って苗木を植える場所を確保し、電動ドリルで菌を打ち込む原木に穴を開けた。縁の下は彼らが支えている。

作業後の昼食もメンバーが準備。おなかをすかせた子どもたちは、もちろん、おかわり！　ものの30分で郷土料理「めった汁」の大鍋は空っぽになっていた。

金沢菊水ライオンズクラブは環境保全に積極的だ。別の山では過剰繁殖が問題になっているモウソウチクを伐採。伐採跡地に桜の苗木を植え、里親制度で1本1本を大切に育てる「千本桜の里」づくりにも協賛している。

子どもたちが作業中に、メンバーたちの手で昼食が作られた。「めった汁」はサツマイモの入った豚汁。材料のサツマイモは、10月初旬にクラブが母子寡婦福祉連合会の皆さんと一緒に収穫したもの

TOPICS

ピアニストの指を動かすのは、子どもたちのピュアな言葉。

東京都・八王子高尾ライオンズクラブ

■文／久保晋作　写真／田中勝明

梯剛之（かけはしたけし）というピアニストがいる。彼の演奏は音の繊細さと響きの美しさに定評があり、国際的にも評価が高い。人の感情と共に自然の音の表情を伝える彼独特の音楽は、多くの人の心をとらえて止まない。音楽の本質をしかと見据える梯さん。実は彼は全盲のピアニストである。

　東京・八王子で生まれた梯さんは小児がんにより、生後1カ月で両目の視力を失った。ビオラ奏者の父と声楽家の母を持ち、幼少期からおもちゃがわりに楽器に親しんできた。4歳から本格的にピアノを習い始め、小学校卒業と同時に「音楽の都」ウィーンへ。1989年、21歳の時に若手音楽家の登竜門といわれるロン＝ティボー国際音楽コンクールで第2位に入賞した。その後はプラハを始め数々の交響楽団と共演、ニューヨークのカーネギーホールでリサイタルを行うなど、日本のみならず世界を舞台にピアノを奏でている。

　国際舞台で輝かしく活躍する一方で、梯さんは小児がん研究や障害者のためのチャリティー・コンサートにも取り組んでいる。2004年には、新潟県中越地震で被災した子どもたちのために慰問コンサートを開催。子どもたちから感謝の手紙が届いた。純粋な子どもたちの言葉は梯さんの心に響き、昨年からは「子供に伝えるクラシック」という梯さん自ら出演する音楽DVDを作成。音楽の本当のすばらしさを知ってほしいと、全国2万3千の小学校へ配る活動もしている。

　11月28日、そんな梯さんを招いてのピアノリサイタルが、八王子市芸術文化会館で開催された。八王子高尾ライオンズクラブ（野崎忠臣会長／48人）が結成15周年の記念行事として企画。八王子盲学校と近くの小学校の生徒を保護者同伴で50組、無料で招待した。

「10年前、初めて梯さんの演奏を聞いてファンになりました。今日は、ぜひ多くの方に聞いて頂きたいという念願かなっての企画です」と野崎会長は話す。

　チャリティー事業が視覚障害者支援の一環となり、著名人に出演してもらうことでクラブのPRにも効果的だ。このリサイタルで得た収益金は、継続して取り組んでいる環境保全・青少年育成活動の資金として利用される。

CLUB REPORT クラブ・リポート

●当欄はライオン、レオ、ライオネスの活動報告を扱います。投稿は住所、氏名、クラブ名を明記の上、800字程度で。関連写真があれば添付してください

岐阜長良川ライオンズクラブ

中学校吹奏楽フェスティバル

9月30日、岐阜長良川ライオンズクラブ（大野弘一会長／55人）は長良川国際会議場で、結成40周年記念事業「岐阜地区中学校吹奏楽フェスティバル」を開催した。参加者はメンバー30人の他、4中学校の吹奏楽部200人とそのご家族、そして一般観客を合わせ700人以上となった。

今回の催しは岐阜市、岐阜市教育委員会、岐阜県吹奏楽連盟の後援を得て開催。4中学校が「おどるポンポコリン」や「タッチ」を始め皆が知っている楽曲や演歌メドレーなど、それぞれ演奏を披露した他、プロ演奏者で作る「アリオン・サクソフォン・カルテット」と中学生が共演する場面もあり、聴衆を楽しませた。

当クラブは3年前、誰もが利用出来、吹奏楽部の皆さんがたくさんの楽譜から演奏する楽曲を選べるよう、岐阜市教育研究所に「楽譜の図書館」を造り、500曲以上の楽譜を寄贈している。安藤征治岐阜市教育長は今回のフェスティバルのあいさつの中でもこの図書館について生徒たちに紹介し、ぜひ有効に使ってほしいと促した。更に、「このようにプロの方や他の学校と演奏する、すばらしい場を設けてくださった岐阜長良川ライオンズクラブさんには大変感謝しています。皆さんも感謝を忘れないで、音楽を更に愛してこれからもがんばってください。期待しています」と続けられた。

子どもたちはプロのすばらしい演奏を聴き、ドキドキしながらも一生懸命演奏し、共演を心から楽しんでいるようであった。たくさんの聴衆を前に舞台に立ち、プロと一緒に演奏する経験を持つことは、一生の思い出に残るはず。生きていく上で貴重な経験となり、大きな自信となるだろう。

皆が一体となり、すばらしいハーモニーを響かせ、プロの奏者も大喜びされ、観客からは「来年もぜひ開催してください」と切望された。有意義な青少年育成、音楽振興のアクティビティとなった。（PR委員長／毛利智典）

連絡先➡058・263・0415

（編）日頃の成果を家族や市民の皆さんに披露出来る貴重な機会。力の込もったすばらしい演奏が出来たことでしょう。

千葉県・酒々井ライオンズクラブ

親と子のふれあい収穫祭

酒々井ライオンズクラブ（齊藤敏雄会長／17人）は6月30日、本年度が初めての試みとなる「親と子のふれあい種まき祭り」を開催した。この事業は新会員の発案により実施されたもの。メンバーの畑を借りて近隣に住む親子を招いて大豆の種まき。ライオンズクラブをより多くの若い世代にも知ってもらい、また子どもと共に農作業を楽しんでもらうことを目的としている。

まいた種も成長した10月13日、続いて「親と子のふれあい収穫祭」を開催。未就学児から小学生までの子どもがいる親子約１００人が参加した。

子どもたちは枝豆を土から引っこ抜き、枝からさやを取る作業など一生懸命にこなしていた。午前中はうす曇りだったが、炊きたての新米やトン汁と共に、皆で収穫した枝豆を食べる頃には、日が差し始め、暖かな絶好の収穫日和となった。子どもたちは終始楽しそうで、ご飯やトン汁をたくさんおかわりする様はお母さんたちもびっくりする程だった。帰りには、自分たちで種をまいて育て収穫した枝豆を、お土産としてたくさん持って帰ってもらった。

（幹事／御園生浩士）

連絡先→０４３・４９６・１１３３

（編）子どもたちだけでなく、若いお父さんやお母さん方も農作業をする機会はなかなかないはず。親子でコミュニケーションを図りながらの貴重な体験、きっと楽しんだことでしょう。

新潟万代ライオンズクラブ

新潟ジュニア俳句大会

イラスト／篠田和夫

新潟万代ライオンズクラブ（吉川穣会長／59人）は中学生の情操教育の一環として、また青少年健全育成を目的として「第1回新潟ジュニア俳句大会」を行った。対象となるのは、我がクラブと同じ中央区にある中学校11校４５００人の生徒たち。ちょうど6月から国語の授業で俳句を教えるとのことだったので、6月末日を締め切り日として募集を開始した。

応募は予想をはるかに上回り、１１８５人から１７２２句が寄せられた。主選者にＮＨＫでもご活躍の若井新一先生、新潟筧句会代表幹事の藤田静水先生を迎え、その他各学校の校長先生並びに実行委員の皆さんにも選句の協力をお願いした。

表彰式は8月11日に挙行。篠田昭新潟市長を始め、多くのご来賓、そして受賞者並びに父兄、学校関係者等多数の出席を頂き盛会となった。篠田市長には祝辞を頂戴すると共に、大会会長と一緒に各賞（特選、優秀賞、佳作、入選、学校特選、学校佳作）受賞生徒へ賞状と賞品を授与して頂いた。

受賞者を代表し、舟栄中学3年の伊藤可奈美さんが受賞の喜びの言葉を述べ、若井・藤田両先生からは総評並びにコメントを頂戴し表彰式の幕を閉じた。次年度も継続アクティビティに予定しており、今年度以上の投句を期待するところである。

（大会実行委員長／柳瀬茂）

連絡先→０２５・２２３・２３４３

（編）この俳句大会は8月14日の新潟日報に関連記事が取り上げられ、市民の皆さんの目にも触れるところとなりました。

大分県・鶴崎臨海ライオンズクラブ

飲んだらのれん

鶴崎臨海ライオンズクラブ（上野美晴会長／37人）は9月25日、全国秋の交通安全運動に協力。国道197号線の鶴崎駅前交差点の東西2カ所で街頭活動を実施した。

大分県警察本部の室城信行本部長は飲酒運転による事故の撲滅に大変力を入れておられる。「飲んだらのれん」（飲んだら車に乗れない）のロゴ入りのれんを作成し、居酒屋、スナック、企業に配布し入口に掛けさせるなどユニークなアイデアを駆使している。337-B地区のキャビネット会議でも講演して頂いたことがあり、室城本部長の意気に感じた会員たちが立ち上がり今回の活動となった。

我々も「飲んだらのれん」のキャッチフレーズを使い、縦1メートル、長さ10メートルの横断幕を2本作成した。当日は上野会長の「飲んだら絶対に車には乗らないを、私たちから実践し、大きく市民の皆さんに訴えましょう」との力強いあいさつでスタート。20人の会員と大分東警察署交通課長、交通安全協会支部長ら警察署員の協力・参加を頂きながら、横断幕と共に通行車両のドライバーに交通安全をアピールした。

車やバイクは私たちにすばらしい利便性を与えてくれる。しかし一歩使い方を誤ると、たちまちにして凶器と化すことを肝に銘ずべきだと思った。皆さんも「飲んだらのれん」をぜひ実行してください。

（前キャビネット幹事／髙橋淳宏）

連絡先→097・527・5727

（編）街頭活動はちょうど帰宅ラッシュの時間帯であったことから、信号待ちをする多くのドライバーと同乗者に認識頂き、効果的だったそうです。

岐阜県・高山ライオンズクラブ

障害者ふれあい魚釣り大会

9月19日、高山ライオンズクラブ（78人）は、高山市内にある赤保木公園で、今年で26年目を迎えた「障害者ふれあい魚釣り大会」を高山市福祉協議会と共催した。

今回は、特別養護老人ホームに入所されているお年寄りや、障害者施設に通う生徒やご家族など約200人を招待。今回は高原喜勇高山市副市長も参加されての開催となった。参加者は赤とんぼが舞う秋空の下、池での魚釣りや金魚すくいなどを楽しんだ。メンバー約30人も、釣り針に餌を付けたり、魚を釣り針から外したりと参加者の手助けをした。

公園内の池には当クラブが寄贈したアマゴやイワナ等約1500匹を放流。池の間際まで車いす等をつけ、メンバーが手伝って釣竿を垂らした。魚が釣れる度に、あちらこちらから大きな歓声や拍手が上がり、にぎやかな時間となった。

年齢や障害に関係なく、手軽に釣りの実感が楽しめるので、毎年この大会への参加を楽しみにされている方も多い。また当日は高山市内のFM放送が取材に来られ、参加者のインタビューも実況中継された。（会長／岩花義治）

連絡先→0577・32・5269

（編）釣った魚はその場で塩焼きにして、皆で弁当を広げ楽しい一日を過ごしたそうです。自分で釣り上げた取れたての魚はとてもおいしそうですね。

東京葛飾ライオンズクラブ

養護学校の運動会に参加

東京葛飾ライオンズクラブ（矢部文雄会長／36人）は10月3日、東京都立葛飾養護学校で行われた第26回運動会に参加・協力した。生徒たちの燃えるようなまなざしと熱心な行動に心から感動を覚えた。

生徒たちの熱い思いには訳がある。本来予定されていた9月29日が雨で流れ、翌30日の順延日もまたまた雨で流れてしまったためだ。生徒たちは日頃からイベントの少ない生活の中で、何より楽しみにしていた運動会だったからであろう。数日前から「マスゲーム」の練習に練習を重ね、100メートル競争ではスタートの練習から一生懸命がんばっていた。

外は雨、やる気で満ちあふれていた生徒たちは残念でたまらず、昨年の運動会のビデオを見て心を癒やしていたようだ。ビデオの画面に自分の顔、姿が映ると我を忘れて歓声を上げる姿は、我々の心をじーんとさせた。

そしてとうとう当日が来た。快晴とまではいかず、一面雲で覆われてはいたが、雨はない。生徒たちはライン引き、飾りつけ等に一生懸命。会場係、プログラム係、校旗の掲揚係などそれぞれが夢中だ。

私はビデオカメラを持ち、生徒一人ひとりの顔を、そして活動の姿を、絶対見逃さないとの気持ちで校庭中を走り回った。校長先生から「生徒のマスゲームはよく観てやってください」と言われていたが、それは見事であった。自分の体が思うようにならないハンディを完全に乗り越え、気持ちを一つに集中した結果、完成したものだろう。

100メートル走の時も途中立ち止まって考え事をしてしまう生徒もいたが、級友たちが声を出し励まし合って最後のゴールまでたどり着いた時は、観客から大きな拍手が湧き上がっていた。

今回は心身共に不自由な生徒たちのお世話係としてお手伝いすることが出来、とても充実し、感動の1日となった。

終了後、生徒たちがまた、今日撮ったビデオを観て歓声を上げることを想像しながら私は帰路に着いた。

（計画委員長／左近允尚典）

連絡先→03・3542・5711

（編）雨のため2度も流れ、3度目の正直となった今回の運動会。待ちに待ったとあって生徒の皆さんはとても楽しめたはず。きっとビデオにはすてきな笑顔がたくさんあふれていることでしょう。

鳥取県・倉吉打吹ライオンズクラブ

薬物乱用防止出前教室

倉吉打吹ライオンズクラブ（49人）は1969年11月の結成以来、今日までアクティビティ・スローガンに「愛と指導で青少年をよりたくましく」を掲げ、一貫して青少年健全育成の奉仕活動を行っている。

昨年度10月から新たに、薬物乱用防止出前教室の準備を始め、今年2月から本番開始。10月現在、小学校5校で5回（内2校は保護者も参加）、中学校2校で3回の出前教室を開催した。

世の中は情報化時代となり、無防備な子どもたちがネット販売などで薬物を簡単に手に入れられるようになってしまった。一度でもこれらに手を出すと、心と体、そして人生をも台無しにし、壊れた脳は元には戻らない。このような薬物の恐ろしさを生徒らに紹介した。

出前教室終了後には「薬物乱用はダメ。ゼッタイ。」のアンケートを全児童、生徒に配布し感想などを記入してもらっている。

中学2年の生徒は、「薬物というものはとても恐ろしいものだということを改めて知った。一回くらいなら、という甘い気持ちがダメだと思った。薬物乱用は絶対やらないようにしたいと思った」と感想を述べている。今後も明日を担う若者たちのために継続して実施していきたい。（会長／米田隆一）

連絡先→0858・22・8805

（編）出前教室はNHKやケーブルテレビ、新聞などでニュースとして大きく取り上げられ、人気上昇中だそうです。ライオンズクラブのPR効果も大。

岐阜県・土岐織部ライオンズクラブ

ライオンズクエスト・ワークショップに教師を派遣

土岐織部ライオンズクラブ（舘林慶二会長／53人）は、9月19日の第332回例会で「ライオンズクエスト・ワークショップに参加して」と題した報告会を行った。

私たちはライオンズクエストを地域の学校で導入・促進することを目的に、8月6、7日に東京で行われたワークショップに岐阜市内の小学校教師2人を派遣。子どもたちが自らを取り巻くさまざまな問題に対処出来るようになるために、このプログラムが大変有効であると考えたからである。教師にこれを体験してもらい、納得して実践へと進んでくれることを期待した。

例会当日は松尾精介副地区ガバナーを始め近隣クラブから多数の会員と、市教育委員会、学校関係者など多くの参加者を得た。ワークショップに参加した2人の教師を講師に招き、報告と感想を述べて頂いて、若干の実践ゲームをすることにより、プログラムをより身近に肌で感じることが出来た。

今回の事業を通して、ライオンズクエストが人と人とのつながりを確かに築き上げることが出来るすばらしい方法であると認識すると同時に、私たちライオンズにはプログラム実践の輪を広げていく責務があると痛感した。

（PR委員長／福岡弘径）

連絡先→0572・55・8198

（編）例会に出席して頂いた学校関係者にもライオンズクエストが理解され、広く実施されるようになるといいですね。

京都うずら野ライオンズクラブ

太陽電池時計を寄贈

京都うずら野ライオンズクラブ（野村徹夫会長／49人）は、クラブ結成25周年記念事業の一つとして、高さ5メートルの太陽電池時計「愛の時計」を京都市に寄贈。京都市役所庁舎前の広場に設置し、7月27日にその除幕式を行った。

市役所庁舎前の広場は毎週日曜日にはフリーマーケットなどのさまざまなイベントが催され、また庁舎前の御池通りは1日中交通量や人の往来の激しい場所である。が、周辺に大きな時計がなく、設置を望む声が多かった。クラブでもその必要性を認識し今回の寄贈となった。市役所の方も同じように考えておられ大変感謝された。

名前の通り、いつまでも市民に愛される「愛の時計」として末永く親しまれることを願っている。

（社会奉仕・福祉委員／春田栄造）

連絡先↓075・212・4800

（編）多くの人が集い、往来する場所に大きな時計があると便利ですね。市民の皆さんも、きっと喜ばれたことでしょう。

東京築地ライオンズクラブ

警察署に「心助くん」寄贈

10月5日、東京築地ライオンズクラブ（佐藤正八会長／18人）は築地警察署ロビーに、「心助くん」と名付けた自動体外式除細動器（AED）を1台設置した。

本体上部には15インチほどの液晶のディスプレーがあり、平時は築地警察独自の案内やお知らせなど、動画や静止画像を自由に表示出来る有効な宣伝媒体。

実際に使用する際には上部の赤色灯が点灯してサイレンが鳴り、液晶画面に使用方法が順を追って表示され、初めてでもスムーズに使用出来るようになっている。この事業により地域住民や施設を利用される方々の救急救命に少しでもお役に立てればと考えている。

（アクティビティ委員長／潘桂華）

連絡先↓03・3235・4010

（編）今後は歌舞伎座や中央区役所にもそれぞれ1台ずつ設置する予定になっているそうです。

●獅子吼（ししく）
①仏が説法するのを、獅子が吼えて百獣を恐れさせる威力に例えていう語。
②大いに熱弁をふるうこと。（広辞苑）

●投稿要領→56ページ

懐かしかった一時

永岡　栄子（島根県・浜田マリン）

それは、ある夏の暑い日の出来事でした。持病の薬をもらうため、昼休みに勤務先の近くにある薬局へ出掛けました。薬局へ行くには、途中、浜田川に掛かる橋を渡らなくてはなりません。

橋は、この辺りではいちばん新しく、両サイドに幅の広い歩道があって、夏の夕暮れには、近所の人たちが皆集って涼を取るような立派な大橋です。強い日差しが照りつける中、その大橋にさし掛かった時のことです。

お世辞にもすてきとは言いがたい格好の男性が、私の目に映りました。麦藁帽子をかぶり、首にはタオル、シャツはダブダブ、半ズボンにツッカケ姿……。

その人は白い布を持って欄干で何かしている様子です。この暑い時間に何をやっているのかしら？　と不思議に思いながら、私は橋を渡り始めました。

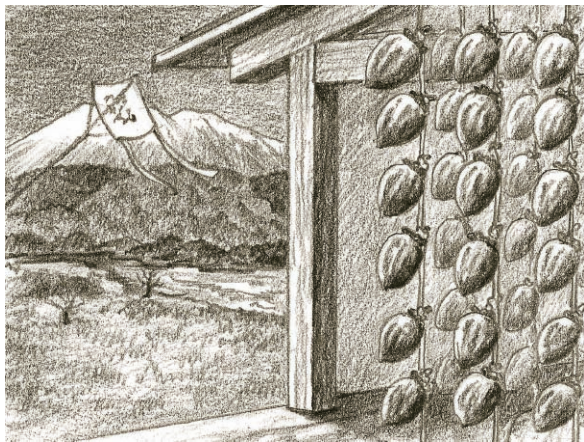
近づいてみると、その人は昔交際があった、真面目でやさしくて明るかった、ある人に似ていました。しかし、口ひげ、顎ひげはぼうぼう伸び放題で確信が持てません。

それでも、勇気を振り絞って、

「Sさんじゃないですか？」

と、声を掛けてみました。すると、その人は汗を拭いながら、

「ああ、栄子さんだね。元気ですか？」

と、返事をしてくれました。やはり私が思ったとおりご本人！

イラスト／小川和政

彼は続けて、

「商売に失敗してから、早十数年。最近は、（姿が変わってしまって分からないのかもしれないが）みんな知らん顔だよ。ようこそ、ようこそ」

と喜んでくれました。

「どうしてこの暑い中、欄干を拭いているの？」

いちばん気になったことを聞いてみました。

「この前、5歳ぐらいの男の子と母親が橋を渡ってるのを見掛けたんだ。その時、男の子は欄干に手を滑らせ、手が真っ黒になってしまったらしくてね。慌てて母親のスカートで手を拭ってしまった。それが白いスカートでね、母親は人がいることも関係なく大声で怒鳴り、子どもは母に負けず大声で泣いていた。

その様子を偶然見掛けて、欄干が奇麗であれば、こんなことにはならなかったのにと気の毒に思ったんだ。それから毎日、暑い暑いと寝ていた時間にこうして拭いているんだ」

ということでした。

十数年の月日が流れて再会出来た人が、変わることなく優しい心で生きていらっしゃる。自分の生活環境が変わってしまっても、奉仕の精神を忘れない彼の姿勢に、私は感動しました。自分の生き方を考えさせられた1日でした。

（事務員・70歳）

少年時代の思い出

本田　文男（鹿児島県・川内）

例年のことだが、８月15日が近づくと、戦中・戦後の頃を思い出す。戦中は艦載機の襲来におびえ、防空壕に逃げ込む毎日だった。戦後は食糧難でひもじい思いをしたことなどを思い出すのである。

私は支那事変の翌年、昭和13年に山間の田舎に兼業農家の８人兄弟姉妹の７人目、五男坊として生を受けた。５～６歳の頃の記憶では、近所の子どもたちと広い農家の庭で陣取り合戦をしたり、鬼ごっこや石蹴りなどして遊び、夏の暑い日でも母の後ろについて山の下刈りに行ったりした。田植えや稲刈りの頃になると、高等女学校が臨時保育所となり、女学校のお姉さんたちが２キロくらいの距離を歩いて送り迎えをする。そして、お遊戯をしたり、時には抱っこしてもらい楽しく遊んでもらった。まだ戦況はそれ程でもなくのどかな時であった。

昭和20年４月に国民学校初等科１年生に入学した。当時は教科書も毎年あるわけではなく、近所の上級生から譲ってもらった。制服は兄や近所の上級生のお下がりを着て入学。胸膨らまし期待の初登校であったが、とても今で言うピカピカの１年生ではなかったような気がする。登校の時は、近所の子どもたち10人ぐらいがグループになって整列し、上級生の「気をつけ！」「前ならい！」「進め！」の号令に従い登校した。履物は草履か裸足であった。

毎日校庭で朝礼があり、大変緊張した。全員「気をつけ」の姿勢で、校長先生が真っ白な手袋をして奉安殿から「教育勅語」を携えて恭しく読み上げられた。その時、確か軍服を着た兵隊さんがいたような気がする。

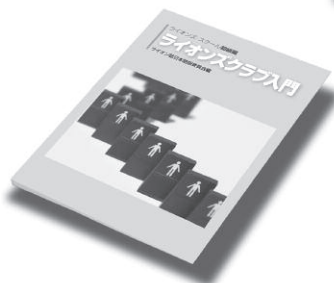
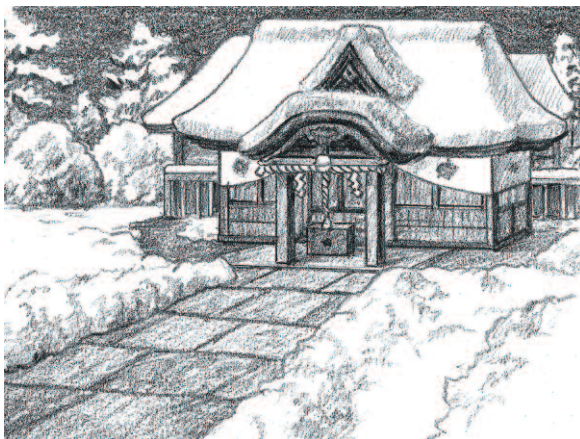
入学して間もない頃には、沖縄から国民学校生が疎開してきて、神社の境内にある村の集会所で、集団生活をしていた。親兄弟と別れ、慣れない生活で食料も不足していたので、大変惨めな思いであったろうと今でも気の毒に思っている。

６月頃であっただろうか、戦況が激しくなり、朝５時に登校し８時頃には家に帰った。昼は米軍の艦載機が20機から50機程が、群れをなして襲いかかってきた。機銃掃射しながらやって来る艦載機のパイロットは、顔が見えるくらいの低空飛行。私は防空壕に逃げ損ない、芋畑で芋蔓を破って息を殺してしのいだこともあった。

８月15日、ついに日本は敗れ終戦となったが、しばらくは衣食不足の時期が続いた。主食は芋・芋飯・大根や里芋など野菜に米粒が浮いているような雑炊はまだ良い方であった。休みの日や初夏にはグミやヤマモモの実、秋にはあけび、うんべ（アケビ科の植物）を取りに山に出掛けたものだった。

しばらくして国民学校は小学校へと変わり、アメリカかユニセフか記憶にはないが、支援によるミルクとコッペパンの給食が始まった。これが唯一楽しみの食事だった。靴を初めて履いたのは小学校５年生の時。学校に配給があり、抽選で当たった物だった。嬉しくてそこら中走り回ったような記憶がある。

中学校に入った頃は、麦飯が食べられるようになった。しかし朝、弁当の重さを確かめると、母が申し訳なさそうに「みんな我慢ばしとっとばい」と言っていた。それでも、以前に比べると学業も運動も楽しく出来る環境になりつつあった。

この頃から、金の卵と言われる中学卒の集団就職が始まった。今の豊かな生活は、この時代に苦労して生産工場に働き、日本の国造りに一生懸命貢献してくれた人たち

のおかげだと思う。
最近の世相を見ると、テレビ・雑誌では政治家や芸能人たちの私生活の暴露記事やスキャンダルをもて遊んでいるような感じがする。あまりに贅沢になり、小さい子どもたちまで「もったいない」という言葉もどこへやら。物ばかりでなく人間の命まで粗末にしていないか考えさせられることが多い。早く平和ボケから抜け出さないと、日本がいつまで豊かな国でいられるか保証の限りではない。

世界に目を向けると、アジアの一部の地域・アフガニスタン・イラク・アフリカ諸国の一部にはいまだ争いが絶えず、住む所もない飢餓状態の人たちがいる。
世界のライオンズクラブでは、LCIFを使って援助の手を差し伸べておられると思うが、国民の一人ひとりが近隣諸国に目を向け、貧しい国々の発展に大人も子どもも一緒になって取り組んで、世界の平和に貢献する時期が来たと思う。

（土木造園業・69歳）

80歳からの挑戦

野口 章子（兵庫県・神戸シニア）

元国際理事の故ライオン団忠夫が、阪神大震災直後に「高齢者に奉仕と会員相互の友愛で生き甲斐を持ってもらおう」と呼び掛けて結成された神戸シニア・ライオンズクラブに入会させて頂き、間もなく10年になります。
入会後、ライオンズの皆様が仕事や趣味に生き甲斐を持たれ、社会奉仕に尽くされている姿を拝見し、私も何かに挑戦して生き甲斐を持とうと思いました。まずは手に届く所から、庭の花の写真の撮り方を教えて頂こうと、クラブの写真同好会へ入りました。

写真と言えば、12年前に他界した主人は大の写真愛好家でした。ライカ、ローライフレックスやニコン、キャノン、私には名前の分からないものや、写真屋さんが使う大型カメラ等、いくつも持っていました。外地勤務中に写した写真が『アサヒカメラ』の表紙に採用された時のうれしそうな顔が、今も目に浮かびます。また女性モデルの作品もよく誇らしげに見せてくれました。

主人は、私の写真もたくさん撮ってくれ、本棚には「章子写真集」が並んでいます。今は時々それを取り出し、若かった頃を思い出したりして、主人の愛情を偲んで幸福感に浸っています。

現在の住まいは40年前に建築。私は広い庭を果樹園にしたいと想い、さくらんぼ、柿、ビワ、ザクロ、キウイなど実がなる木や、ソメイヨシノ、八重桜など花の木の苗を植木屋さんと一緒に汗をかきながら植えました。今はそれが見事に成長して花を咲かせ、実をならせています。中でもいちばんの自慢は小枝から挿木し、丹精した八重椿で、大輪の花を咲かせ庭に君臨していま す。その庭がとても気に入っているので、庭に咲く花々を少しでも美しく撮りたいと写真の勉強に励んでいます。

写真同好会では「余分なものをカットしてこそ、良い表現が出来る」と教えられました。これは俳句でも全く同じで、歌曲の場合もどこで最高に盛り上げるかがポイントになります。自分ながらに芸術の共通点が少し分かったような気がして感動しています。この挑戦で得た感動は何ものにも代え難く、この気持ちをライオンズクラブでの奉仕の原動力としたいと思っています。

また、写真の他にも、若い頃から憧れのクラシック音楽に挑戦し、若く美しい先生のご指導で日本の歌曲や、歌劇「蝶々夫人」のアリア「ある晴れた日に」などの練習に励んでいるところです。

この喜びと幸せをいつまでも、そしてクラブの皆様と仲良くしながら80歳代を元気に乗り切りたいと思っています。ライオンズクラブの一層の発展を祈りつつ。

（主婦・82歳）

ライオンズクラブと私

服部　豊（愛知県・名古屋葵）

私は昭和4年に生を受け、日本の戦前、戦中、戦後の歴史と共に名古屋市緑区有松町で育ってきました。「天の時・地の利・人の和」という孟子の言葉の通り、天がこの良き時代に生を与えてくれたことに感謝しております。

私が生まれた有松町は、今年開村400年という歴史と文化の町。東海道の町並みも天明の頃からそのままの姿を残していま す。伝統の「有松絞り」は400年の間、絶えることなく代々継承され、今なおその技法を守り続けています。地元産業も、昔

からの浴衣、手ぬぐいばかりでなく洋品、インテリア、エクステリア（外構）に広がってきました。

我が名古屋葵ライオンズクラブは、戦後20年を過ぎた頃に産声を上げました。その折、有松の大先輩から声を掛けられ、ライオンズクラブが何をやっているのかも知らぬまま、チャーター・メンバーとして入会しました。私はメンバー50人中いちばんの若輩者で、当時36歳でした。第1例会で、会長、幹事から今後の例会は絶対出席を続けてほしいという強い要望があり、これまでその言葉に従い一度も休むことなく、例会出席回数は千回を超えました。

結成から4年後の昭和44年は、クラブにとって大変多忙な年でした。まず、7月3日～5日に東京・九段下にある日本武道館で、第52回国際大会が開催され、我がクラブからも多数のメンバーが参加しました。

7月15日には記念すべき100回例会を開催。時の今井貞一地区ガバナー（故人）をお迎えして盛大に行われました。

11月22日、全国友好葵クラブ結成。静岡で大会が開催され、我がクラブからも多数出席しました。当時は5クラブでスタートしましたが、現在は14クラブへと発展し、毎年全国大会が各地で開催されております。

その後昭和46年、私が幹事に就任しました時、韓国・大邱南ライオンズクラブとの姉妹提携が行われました。私は、半年前から何回も準備のため大邱へ行きました。今となっては懐かしく思い出されます。そして現在も毎年交流が続いております。

昭和55年に名古屋緑ライオンズクラブ、昭和61年には名古屋樟ライオンズクラブをエクステンションし、チャーター・メンバーも多く移籍され寂しく感じられました。

10年、15年と周年行事を続け、平成17年には40周年を開催することが出来ました。

私のライオンズ生活も人生の半分以上を占めるようになりました。この42年間、風邪を引いた程度で、病気にもならず今日までこられたのも、ライオンズクラブで生涯の友がたくさん出来、例会で顔を合わせるのが何よりの楽しみとなったからだと感謝しております。まさにライオンズの輪は「人の和」であることをしみじみと感じながら、例会出席1200回を目標としております。

メンバーの皆様と共に奉仕の精神を忘れることなく先輩の築き上げた歴史を大切に守り続けていきたいと思います。

（有松絞り製造販売・78歳）

ふるさと探訪

秋田県能代市

日本海を臨む木都上空で、巨大アッカンベーが風に舞う。

■文／砂山幹博　写真／田中勝明

謎多きべらぼう凧起源説

能代港の岸壁近くの公園で、数人の大人がかがみ込み、いそいそと何かの準備を進めている。何が始まるのかと眺めていると、「せーのっ」の掛け声と共に3畳はあろうかという大凧が立ち現れた。

真っ赤な舌を出した何ともユーモラスなこの凧こそ、能代凧の代名詞「べらぼう凧」である。

この凧、坂上田村麻呂が東北地方へ遠征した際に入港の目印にしたとか、宴会で舌を出した顔を描いて腹踊りをした船乗りが、船頭に「このべらぼうめ！」としかりつけられたが、殊の外喜んだ船主がその絵で凧を作らせたのが始まりとか、由来は諸説ある。絵柄を検証したところ、明治の中頃に今の形になったことが分かっている。

舌を出す絵柄でべらぼう凧の名は知られるようになったが、会津若松の「会津唐人凧」を始め長崎県や隠岐の島など日本海側に何カ所か舌を出した凧があり、能代凧だけが唯一のアッカンベー凧というわけではない。

「他の地域で舌を出している凧はいずれも絵柄が勇ましいけれど、能代の凧は子どもの顔。しかも男女の絵柄があることで珍重されるんです」

と話すのは、能代凧保存会の角谷俊明会長。能代凧の保存と継承を図る活動を行う傍ら、会のメンバーらとたまに集まっては凧を揚げるという根っからの凧好きだ。この日、岸壁で大凧を揚げようとしていたのも彼らである。

能代の夏を彩るのが「能代ねぶながし」の大灯篭（左）なら、べらぼう凧は冬を代表する風物詩

べらぼう凧の男と女の見分け方は簡単。芭蕉の葉が描かれた頭巾をかぶった方が男べらぼうで、ぼたんの花の頭巾をかぶっているのが女べらぼう。一目瞭然である。角谷会長に、どちらの凧が好きか聞いてみた。

「能代凧はべらぼう以外にも、七福神や金太郎など絵柄も豊富。地元では特に武者絵を好む人が多いですよ」

聞くと保存会のメンバーは皆、武者絵派。なんでも上空で風を受けて、凧の骨が反ったとき、武者絵の絵柄の目の部分がキリッとつり上がって、ますます勇ましく見えるのがたまらないという。

伝統を今に伝える凧職人

かつては5軒あった能代凧の専門店も今では1軒を残すのみ。明治20年創業の「北萬」では、夏は提灯、冬は凧を作るのが祖父の代からの家業である。現在は二代目の北村長三郎さんから娘のマツ子さんに代替わりしている。

「40年前は子どもたちが競って凧を買いに来て、行列が出来る程だったんだけどね」

と、長三郎さんが感慨深そうに話す

←北萬二代目の北村長三郎さんと、娘のマツ子さん

男へらぼう
九紋竜
いがみの権太
女へらぼう
女へらぼう
いがみの権太
いがみの権太
九紋竜
えびす

風の街・能代を象徴する防砂林と風力発電のプロペラ群

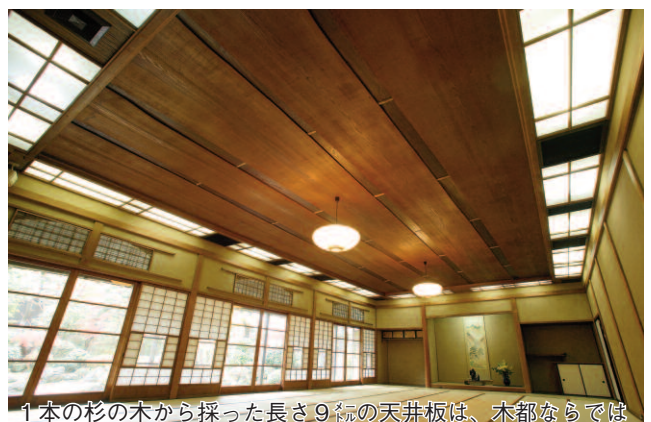
1本の杉の木から採った長さ9メートルの天井板は、木都ならでは

と、マツ子さんも

「昔はそりに凧を付けて、引っ張ってもらった思い出がある。でも最近は雪が少ないからね」

と、凧で遊んだ懐かしい時代を振り返る。

子どもの格好のおもちゃだった凧もテレビの登場によって次第に色あせた。現在も日本各地から注文が入るが、揚げて遊ぶというよりはコレクションとしての要素が強い。絵柄は25種類あるが、売れる絵柄はだいたい決まっており、やはり県外からだとべらぼう凧が圧倒的だという。

骨に使う竹は1本1本小刀で削って作る。縦骨2本、横骨3本を組み合わ

郷土自慢・クラブ自慢

能代ライオンズクラブの郷土自慢は、だまこ鍋。比内地鶏のスープに、長ねぎ、ごぼう、エノキにセリ……見た目も具も、きりたんぽ鍋とよく似ているが、ご飯をつぶして丸めた「だまこ」が入っている点が異なる。能代ではきりたんぽと人気を二分する家庭料理で、秋になり、あきたこまちの新米が出始める頃から食卓に上がる鍋料理である。

▼能代ライオンズクラブ（瀬川一彦会長／19人）＝1961年6月14日結成／スポンサー：秋田ライオンズクラブ

■能代ライオンズクラブから読者プレゼントがあります（56ページ）

せ、墨で下絵書きした和紙を骨に貼り付ける。髪の毛を手書きし、最後に色付け。すべての工程をマツ子さんと旦那さんの二人だけで行うため、1枚作るのにどうしても4～5日はかかってしまう。絵柄は手書きだから、よく見ると1枚1枚微妙に違いがある。何枚か並べた中から気に入った1枚を選ぶお客さんもいる。

かつては能代凧にも版木があって、大量生産が可能だったらしい。「らしい」というのは、その版木が全く残っていないためである。なぜ残っていないかというと、昭和20年代と30年代に2度の大火に見舞われ、焼けてしまったからだ。日本海に面して風が強い上、延焼を拡大させる木材が能代の街には豊富に存在した。秋田杉の集散地として栄えた「木都」において、強風こそがアキレス腱であった。

が、逆に言えばその強風があったからこそ、凧揚げが盛んになったとも言えよう。風が強すぎて上空で凧を自在に動かせないという理由で、ここ能代では「凧を制止させる」という楽しみ方が生まれた。

毎年4月の下旬になると「全市凧揚げ大会」が開かれ、10畳もあろうかという巨大べらぼう凧を始め、さまざまな凧が上空にずらりと並び、能代の街を睥睨する。

こころのチキンスープ●ライオンズ編

感謝を伝えた残された時間

構成／青山研

「人生は短い物語に似ている。大事なのはその長さではなく、価値である」
――セネカ――

生きているとはどういうことなのだろう。人は健康である日々が当たり前だと思いがちなのかもしれない。福井県・小浜ライオンズクラブのライオン赤尾寿夫は、時にそう考えたりもした。

ライオン赤尾は5年前、重い病にかかった。ウイルス性髄膜炎、小脳炎、パニック障害による度々の心停止、更には、全く体が動かないという重体に陥ったのだ。頭に字が浮かんでも、それが書けない。周りがどうなっているのか、まるで認識出来ない。誰とも会いたくなかった。病院のベッドの上で、生きているとはどんなことなのだ、と繰り返し煩悶した。思ってもみなかった現実の自分の姿が、そこにあった。

その危機から生還出来たのは、奇跡に近い出来事だったのかもしれない。生還して、再びライオンズの活動に参加出来た時、ライオン赤尾は思った。

「私はライオンズクラブという団体に所属して奉仕活動に努めている。でも、人が生きる、生活するとは何だろう。『生きる大切さ』を考えなくてはならないのではないか」

そんな日々の中で、ライオン赤尾は病と闘う一人の若い女性がいることを知った。その人は、6年6カ月もの闘病生活を続けていた。高校生活最後の思い出となる修学旅行の時、買い物の途中で倒れたのだ。自力で食事や運動をすることが出来なくなり、呼吸も人工呼吸器の助けを借りなければならなくなった。

喉に穴を開けてカニューレという器具を挿入しているため、会話も出来ない。寝たきりの日々を送っている女性であった。ライオン赤尾は自らの闘病の日々を思い、その人を励まそうと考えた。幾度となく女性の家を訪ねたが、厳しく断られた。会えない。望みは絶たれたと思った。自らのことを思えば、その女性とご家族の心情も思いやられた。

そんな日々の中で、小浜ライオンズクラブは「生きる」をテーマにした講演会を企画する。講師にはサリドマイド障害者である白井のり子さんが招か

イラスト／吉田悦子

れた。ライオン赤尾は、闘病生活を続けている女性と、そのお母さんを講演会に招こうと考えた。強く生きてほしかった。クラブでは白井さんに頼んで、激励の色紙を書いてもらい、女性に贈った。

講演の当日。出席してくれたのはお母さんだけだった。やはり病と闘う姿を見られたくないのか。ライオン赤尾は自らのことを思い、その女性の気持ちが分かるような気がした。若い女性が、喉に穴を開けた姿で人前に出たくないと思うのは当たり前だった。

奇跡が起こった。講演会が終った後、白井さんが急に、その女性の家を訪ねたいと言う。「彼女を救うには、今、会わなくては……」。

白井さんの言葉に、かたくなだったお母さんがうなづき、会員たちを家へ案内してくれた。講演の直前、お母さんは涙をいっぱいにためて白井さんと話していた。この出会いによって、ご家族が共に「今を大切に、力強く生きよう」と決意されたのだろう。

その日から6カ月が過ぎた。夏の日だった。小浜ライオンズクラブに訃報が届いた。病と闘い続けた女性が、23歳の短い生涯を閉じたのだった。ライオン赤尾らは言いようのない悲しみに押しつぶされそうになりながら、彼女の家に急いだ。

痛みも悩みも無く、静かに彼女は横たわっていた。優しい、奇麗な顔だった。長い長い病との闘いの跡など、どこにも感じられない静かな寝顔のように思われた。

枕元に1冊の画用紙が置かれていた。字が、画用紙いっぱいに書かれていた。3歳児が書いたような字だった。彼女は残された力を振り絞るように、字の練習をしていたのだ。小脳の病は字が書けなくなる。その痛々しい障害を乗り越え、これまでお世話になった人に、お礼の手紙を書きたいと、ただその一心で、練習を繰り返していたのだった。

ライオン赤尾はじっとその字を見つめていた。胸のうちに激しく込み上げてくるものがあった。

23歳。おしゃれもしたかっただろう。おいしいものも食べたかっただろう。旅行もしたかっただろう。愛しい人とも出会いたかっただろう。でも、彼女は残された生涯の力を振り絞るように、お礼のための字の練習をしていたのだった。

涙があふれた。こんなにも自分の体の中に涙があるのか、拭いても拭いても涙が込み上げてきた。この娘さんは、残された最期の時間を、ただひたすら「お世話になった人にお礼をする」ために使ったのだ。涙を誰が止められよう。

ライオン赤尾は、今思う。クラブは、人の生き方にかかわる奉仕活動を続けてきた。だが、奉仕活動を、ただ「事業」として流してしまってはいなかったか。「生きる大切さ」を考えた活動になっていただろうか。23歳の生涯を閉じた女性がそのことを教えてくれたのだった。

読者プレゼント

杉はがきを5人の読者に

「ふるさと探訪」(49ページ)に登場した秋田県・能代ライオンズクラブから「杉はがき」が5人の読者にプレゼントされます。

能代市は秋田杉の産地として名高く、仁鮒水沢スギ植物群落保護林は広さ18ヘクタール。推定樹齢250年の杉が約3千本も林立しています。秋田杉の特徴は木目に節がなく真っすぐなこと。年輪は目が細かく均一で、淡紅色を帯びています。

その秋田杉を厚さ5ミリにスライスして作った杉はがき。送料は、官製はがきより少し高めの80円が必要ですが、郵便はがきとしてご使用頂けます。

裏面には世界自然遺産の白神山地や、きりたんぽ鍋のイラストが施され、杉の香りがほのかに漂います。一味違うあいさつ状やお便りにいかがでしょうか。

応募要領：はがきに住所、氏名、電話番号、クラブ名を明記し、ライオン誌「杉はがき」プレゼントあてに。ウェブサイト(www.the-lion-mag.jp/modules/form1)からも応募出来ます。本誌へのご意見、ご感想もお書き添えください。締切は1月末日。応募多数の場合は抽選となります。当選のお知らせはプレゼントの発送をもって代えさせて頂きます。

2008年2月号予告

THEME **エコ・ライフ**

屋上庭園や壁面緑化、また太陽光を活用したソーラー発電から雨水利用、更には今、注目の燃料電池を始めとした最新のエコ住宅事情を紹介する。併せて、エコ・ライフの実践編として、環境に優しい生活を心掛けているメンバーを取材する他、エコ運転の体験リポートにもトライする。

ライオン誌投稿要領

▼原稿は誌面の都合で編集したり、掲載出来ない場合があります。原則として原稿の返却は致しません。返却希望の場合はその旨を明記してください。▼電子メールでの写真投稿は長辺1,600ピクセル程度のJPEG最高画質で。▼住所、氏名、クラブ名を明記。

■**クラブ・リポート**36～41ページ：アクティビティ、例会など、クラブの活動を具体的に800字程度で。関連写真があれば添付。

■**獅子吼**43～47ページ：会員及びその家族によるエッセー、提言など。1,600字程度。職種、年齢を明記。

■**こころのチキンスープ・ライオンズ編**54～55ページ：ライオンズにまつわる感動的なエピソードの概略、あるいは1,200～2,000字程度の原稿。ストーリーは本誌ライターが書き下ろします。

送付先：
〒104-0045　東京都中央区築地2-2-1　築地細田ビル7階　ライオン誌事務所
Fax：03-3546-2630　E-mail：edit@thelion.jp

築地通信

●今月号から本誌がA4判にリニューアル。そこで11月号で本誌専用ファイル(B5判)の残部無料提供を呼び掛けたところ、応募が殺到。あっという間に在庫の半分がなくなりました。引き続き1月末まで申し込みを受け付けていますので、ご希望の方は当事務所までお申し込みください。在庫がなくなり次第終了します。送料実費のみをご負担ください。(亀田)

●**訂正とお詫び**

本誌12月号において以下の誤りがありました。

7ページ5～6行目に「2009～11年国際理事に立候補しているライオンズ杉本忠夫」とあるのは、「2008～10年国際理事」の誤りでした。関係各位にご迷惑をお掛けしたことをお詫びし訂正致します。

ライオン誌事務所来訪者芳名録

11/5　愛知県名古屋堀川　石原　勝美
11/9　宮城県仙台エコー　錦戸光一郎
11/14　福井県敦賀みなと　西井　伸哉
11/14　東京上野東　横山　莊司
11/15　北海道札幌フロンティア　上口　義雄
11/16　北海道岩見沢メープル　梅田　利明
11/27　東京　浜本　正信
11/3　兵庫県福崎サルビア　竹内美椰子
11/4　神奈川県横浜みなとマリン　伏見　龍
11/4　神奈川県横浜都筑シーサイド　廣瀬　恒彦
11/4　神奈川県横浜久良岐　太田　中

Official publication of Lions Clubs International

Published by authority of the Board of Directors in 21 languages - English, Spanish, Japanese, French, Swedish, Italian, German, Finnish, Korean, Portuguese, Dutch, Danish, Chinese, Norwegian, Icelandic, Turkish, Greek, Hindi, Polish, Indnesian and Thai.

Lions Clubs International Headquarters
300 W 22ND STREET OAK BROOK IL 60523-8842 USA
TEL.(630)571-5466 FAX.(630)571-8890
Web site: www.lionsclubs.org

ライオン誌日本語版事務所
〒104-0045 東京都中央区築地2-2-1 築地細田ビル7階
TEL.(03)3542-9571(代)　FAX.(03)3546-2630
E-mail. edit@thelion.jp
Website:www.thelion-mag.jp

愛読される誌面を目指して

ライオン誌
日本語版編集長
◉
古谷野環

皆さん、こんにちは。新装なった本誌1月号はいかがでしょうか。

私は昨年度から、ライオン誌日本語版委員を務め、そして今期は編集長という大役を仰せつかりました。微力ではありますが、精いっぱい努力したいと思います。

当委員会では毎月会議を開き、「いかにして『ライオン』誌を読んで頂こうか」「ライオンズ・メンバーにどうしたら必要な情報を提供出来るか」など、試行錯誤しながら編集内容や誌面作りを検討しております。

そんな中、昨年度の委員会で、『ライオン』誌日本語版創刊50周年を記念して判型を大きくし、国際協会標準判のA4サイズに戻してはどうか」という案が出されました。内容についても各クラブへアンケートを実施し精査した結果、「より見やすく、より読みやすい」というビジュアルに重きを置こうと、誌面を大幅刷新することに決定しました。

日本に最初のライオンズクラブが結成されたのは1952年。当時は8カ国語版の『ライオン』誌しかなく(現在は21カ国語・32版)、日本の会員には国際本部発行の英語版『ライオン』誌が配布されていました。当然、読めない方も多かったため、日本語版発刊を切望。先人たちの大変な努力の末、1958年8月10日、念願かなって『ライオン』誌日本語版が創刊されました。

創刊号はB5判サイズで64ページ。表紙は京都祇園祭の華麗な写真で飾られています。その後、1962年7月号からA4判にサイズ変更されましたが、オイルショックの影響で、1974年7月号以降はB5判になったと聞いております。

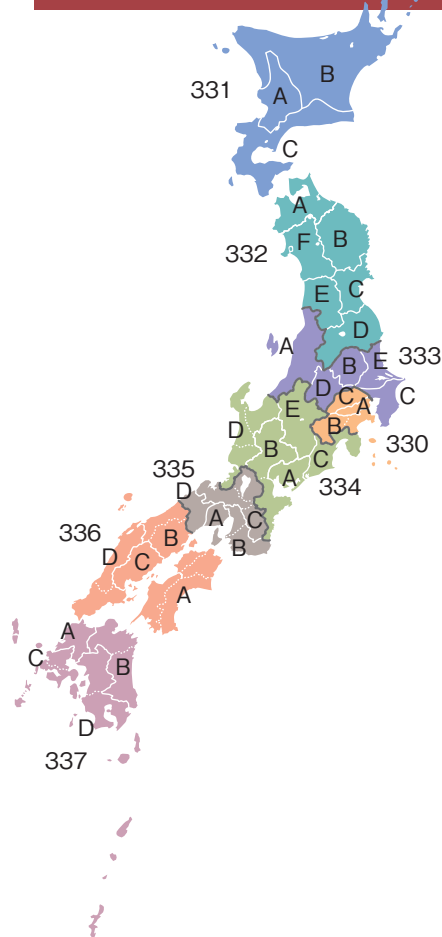
昨今のITの進化はめまぐるしく、『ライオン』誌ウェブマガジンで、いち早く情報発信が出来るようになりましたが、いつでも手に取ることが出来る『ライオン』誌もまた便利なもので、両方をうまく共用して頂けたらと思います。

今後もより一層、愛読される誌面作りに努めたいと思います。

日本のライオンズ

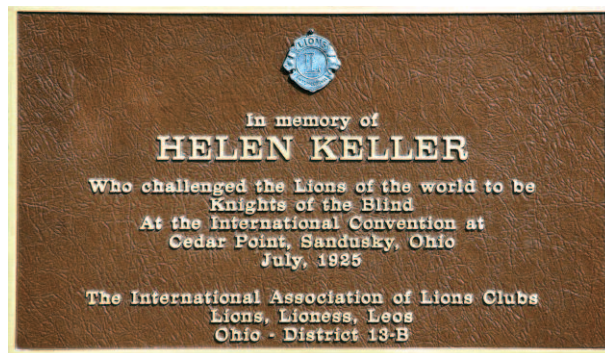
2007.10.31　各地区キャビネット事務局集計

地区	都道府県	■クラブ数	期首からの増減	■会員数	期首からの増減
330-A	東京	204	0	5,375	126
330-B	神奈川・山梨・東京	191	0	5,562	65
330-C	埼玉	104	0	2,881	26
330	計	499	0	13,818	217
331-A	北海道（道央）	77	0	2,747	-8
331-B	北海道（道北・道東）	94	-2	2,930	56
331-C	北海道（道南）	61	0	2,013	6
331	計	232	-2	7,690	54
332-A	青森	68	0	2,057	21
332-B	岩手	56	0	1,806	30
332-C	宮城	83	0	1,671	-16
332-D	福島	77	0	2,200	21
332-E	山形	57	0	1,981	49
332-F	秋田	53	0	1,453	0
332	計	394	0	11,168	105
333-A	新潟	80	0	3,000	27
333-B	栃木	56	0	1,401	32
333-C	千葉	132	1	3,570	52
333-D	群馬	56	0	2,094	24
333-E	茨城	80	0	2,875	49
333	計	404	1	12,940	184
334-A	愛知	118	0	5,917	83
334-B	岐阜・三重	87	0	4,026	29
334-C	静岡	84	0	3,509	35
334-D	富山・石川・福井	100	0	4,393	81
334-E	長野	53	0	2,298	31
334	計	442	0	20,143	259
335-A	兵庫（東）	107	1	2,949	86
335-B	大阪・和歌山	203	-1	6,977	80
335-C	滋賀・京都・奈良	123	0	4,633	63
335-D	兵庫（西）	66	0	2,300	50
335	計	499	0	16,859	279
336-A	徳島・高知・香川・愛媛	156	0	6,420	102
336-B	鳥取・岡山	99	0	3,703	19
336-C	広島	105	-1	4,073	56
336-D	島根・山口	109	0	3,674	9
336	計	469	-1	17,870	186
337-A	福岡・長崎	120	0	4,986	67
337-B	大分・宮崎	86	-2	2,817	-1
337-C	佐賀・長崎	85	0	3,229	-22
337-D	熊本・鹿児島・沖縄	143	0	4,553	2
337	計	434	-2	15,585	46
総計		3,373	-4	116,073	1,330
世界のライオンズの		7.5%		9.0%	

日本ライオンズクラブ分布図

世界のライオンズ

2007.9.30　国際協会集計

ライオンズ国または領域	200カ国
世界のクラブ数	45,112
世界の会員数	1,296,843
期首からの増減	6,869

国	クラブ数	会員数
アメリカ	12,973	384,576
インド	4,937	142,803
日本	3,388	115,903
韓国	1,962	82,770
イタリア	1,291	49,837

皆さんは、ある女性がすべてのドアを一度だけノックする機会を与えられ、
ドアがすぐ開かないと死んでしまい、永遠に帰れなくなるという伝説を聞いたことがあると思います。
私はあなた方にとってのその機会なのです。私はあなた方のドアをノックしています。
私は奉仕のための素晴らしい機会をいっぱい差し上げることが出来ます。
ライオンズの皆さん、盲人のために暗闇と戦う十字軍の騎士になってくださいませんか？

ヘレン・ケラー

1925年7月、オハイオ州サンダスキーにおけるライオンズクラブ国際大会にて

視力ファーストⅡキャンペーン

世界中から予防可能な失明をなくすために

ライオン誌1月号
昭和33年12月19日付第三種郵便物認可 定価180円 送料実費76円
2007年(平成19年)12月20日発行 毎月1回20日発行 第50巻第7号
発行所 ライオンズクラブ国際協会ライオン誌日本語版事務所 〒104-0045 東京都中央区築地2-2-1 築地細田ビル7階 Tel 03-3542-9571
印刷所 凸版印刷株式会社